

秋田県文化財調査報告書第31集

# 大湯環状列石

周辺遺跡分布調査概報

1975-1

秋田県教育委員会



PL\_2 道路周边航空写真



## 目 次

### 序

### 例 言

I 緒 文	1
調査組織	1
II 地 形 地 質	2
III 調 査	3
1 分布調査	3
2 発掘調査	4
1 グリット地区	4
2 トレンチ地区	8
IV 出 土 遺 物	13
1 完形 掘元土器	13
2 グリット出土土器	18
3 トレンチ出土土器	22
4 S T トレンチ出土土器	35
5 土偶・土製品	37
6 石　　器	38
V 考　察	42

## 図　図版目次

### 図

Fig 1(a)	遺跡位置及地形図	1
Fig 1(b)	調査地域図	1
Fig 2	グリット地区実測図	5
Fig 3(a)(b)	グリット土層図	7
Fig 4	トレンチ地区実測図	9
Fig 5(a)(b)	トレンチ土層図	9
Fig 6	G地区土層図	12
Fig 7(a)～(c)	トレンチ出土土器実測図	14～16
(d)	トレンチ　グリット出土土器実測図	17
Fig 8(a)～(d)	グリット出土土器指影	18～21
Fig 9(a)～(j)	トレンチ出土土器指影	22～34
Fig 10	S Tトレンチ出土土器指影	36
Fig 11	土偶　土製品実測図	37
Fig 12(a)～(c)	石器実測図	39～41

### 図　版

P L 1 (口絵)	トレンチ出土土偶	
P L 2 (口絵)	遺跡付近航空写真	
P L 3	遺跡周辺修利採取状況	1
P L 4	グリット土層図	6
P L 5	G地区土層図	12
P L 6(a)～(c)	トレンチ出土土器	43～45
(d)	グリット　トレンチ出土土器	46
P L 7(a)～(d)	グリット出土土器	47～50
P L 8(a)～(j)	トレンチ出土土器	51～60
P L 9	S Tトレンチ出土土器	61
P L 10	グリット　トレンチ出土の口縁部及び把手	62
P L 11	土偶　土製品	63
P L 12(a)～(c)	出土石器	64～66
P L 13(a)～(b)	グリット地区	67～68
P L 14(a)～(c)	トレンチ地区	69～71

## 序

国特別史跡大湯環状列石（昭和31年3月31日指定）は繩文後  
期の環状組石群として極めて特異な遺跡であります。

昭和48年度の環状列石周辺関連遺跡の緊急分布調査に続いて  
昭和49年度は一部発掘を加えた分布調査を実施しました。指定  
地「万座」の北西部から著しい遺物の出土を見、住居跡らしい  
遺構も発見されております。土木工事等の進展にともない、遺  
跡周辺が現状変更されるおそれもあり、この調査が道路の保護  
と性格解明の手がかりとなれば幸いであります。

この情報が今後大湯環状列石の学術的研究と保護に貢献する  
ことを期待する次第であります。

昭和49年12月21日

秋田県教育委員会 教育長

山 本 一

## 例　　言

- 1 この報告は 大湯環状列石周辺遺跡分布調査の一部発掘調査を含む概報である。
- 2 調査主体者は 秋田県教育委員会であり担当者は 奥山 潤 である。
- 3 調査期間は 昭和49年6月15日より10月31日まであり 発掘調査は7月21日より8月5日まで行なった。
- 4 出土品は大量にのぼったが この報告には その代表的なものを示すにすぎない。土器個別の研究は今後の作業である。
- 5 この報告の出土遺物（土器）及び考察については 奥山の口述を大里が筆記した。地形・地質と石器は田村が その他は大里が記述し ともに奥山の指導を受けた。
- 6 遺物の整理 実測図及び拓影は 県立上和田高校社会科同好会が当り 構成は大里が担当した。
- 7 写真はフィールド 遺物とともに大里が撮影した。
- 8 遺物はすべて鹿角市教育委員会に保管された。

Fig. 1 (a) 遺跡位置及び地形図 (○印)



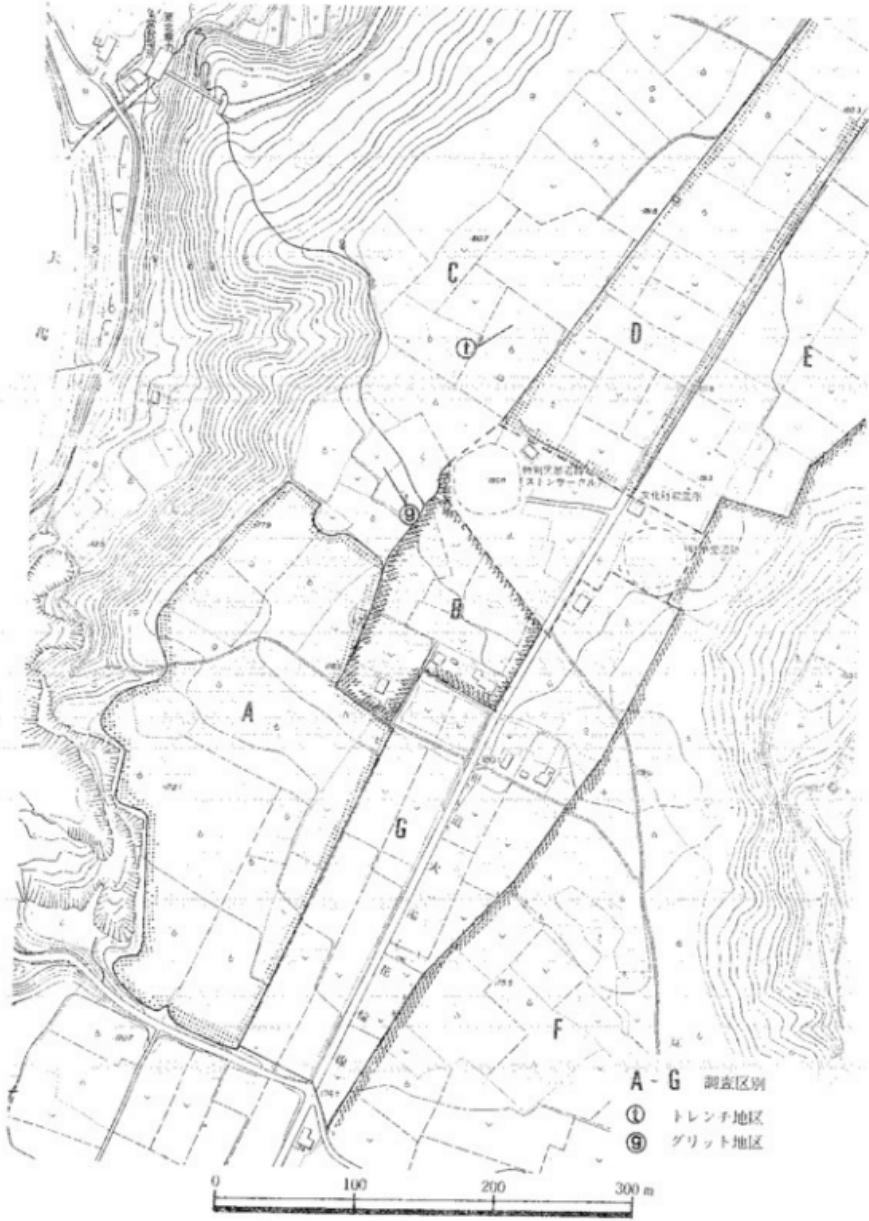


Fig 1 [b] 調査地域図

## I 緒 文

「大湯環状列石」は 昭和31年に特別史跡に指定され 現在まで細々ながらも保護の手が加えられてきた。しかし 最近の土地開発の波は 遺跡周辺にも及び 著しく現状が変更される危機に直面している。(PL 3)

秋田県教育委員会および鹿角市教育委員会は 遺跡保存の手がかりとすべく 向後数次の周辺遺跡分布調査を計画した。そして昨秋第1次緊急分布調査が実施された。(1)

本年度は 周辺分布調査を継続するとともに 前年度調査地域の一部を 発堀調査することとし 昭和49年6月15日より調査に着手した。場所はいわゆる万座遺跡の北西方であり 分布調査予定面積は約 200,000m<sup>2</sup> である。うち一部発堀調査は 7月21日より8月5日までとし 4箇所計 300m<sup>2</sup> を対象とした。

調査予定地城は 大部分が果樹園であり 出土遺物の全くみられないところもあったが ある部分では著しく出土した。出土品の大部分は いわゆる「大湯式土器」であり 青森県岩木山麓 十腰内遺跡の出土品と共通するものもあるがその全部ではない。

## 調 査 組 織

調査主体者 秋田県教育委員会

調査責任者 山本 一

発堀担当者 奥山 潤(秋田考古学協会員)

調査員 田村 実(大館市立城南小学校) 田中修造(県立桂高校) 早坂敏和(県立十和田高校) 佐藤寛直 大里勝蔵(県立十和田高校定期制)

発堀補助員  
十和田高校社会科同好会 成田美代子 森下照子 田子教子 古川真理子 松岡孝子 奈良梨子 石井つえみ 佐藤悦子 潤川アキ子 長田美代子 中山美千代 福士妙子 戸決久美子 黒沢百合子 小林二夫 金田一均 佐藤孝則 普原 力 村木剛文 工藤悦男

大館桂高校社会部 千葉智子 工藤早苗 庄司こずえ 辻 緑 佐々木暎子 荒川恵美子 桜庭真澄 戸田由美子 成田悦子 順内雪子 萩田三津子 加賀谷久美子 桜田佳子 小武海雅子 相馬若子 桜田厚子 山田都子 佐藤真紀 斎藤喜佐子

協力 富沢正雄(鳴鶴O.B.) 原田幹子 京谷悦子(桂高校O.G.)

監査 柳沢 衡(鹿角市教委)



PL 3 遺跡周辺砂利採取状況

(1)「大湯環状列石周辺遺跡緊急分布調査報告書」 秋田県教育委員会 鹿角市教育委員会 1974

## II 地 形 地 質

鹿角盆地の北部を南流する大湯川の東岸に 風張 申ヶ野 柴平を経て花輪方面に到る 一連の平坦面が形成されている。その平坦面の風張付近における いわゆる風張台地の南端が 今度の調査区である。

台地は標高約 180m で 大湯川との比高は約40m である。大湯川の両岸には 河岸段丘がよく発達しており 5段の段丘面を認めることができる。

十和田浮石層と その二次層を主体とする風張台地は 第2段丘面にあたるものであり 対岸の閑上・蟹沢一小坂台地に到る平坦面もこれに相当する。段丘崖は シラス台地特有の急崖を成すがこれは浮石流堆積後の急激な侵蝕作用を物語るものである。台地下の第3段丘面(台地との比高約 12m) に 台地上の遺物包含層を被っていると同じ大湯浮石層をみることができることから 当時の河床を 第3段丘面あたりと考えることができる。台地東方及び対岸の黒森山周辺には かなり開拓されて いわば丘陵化した古期の第1段丘面が認められる。

台地下の低位段丘面は 主として水田に利用されており 国道 103号線がその中央を走っている。また丘陵化した高位面は 杉林 堀地になっている。そして風張台地は 果樹園 堀地として利用され 耕作のために台地の諸所に割りこまれた浅い侵蝕谷は埋めたれ また間に高い部分は削り取られるなど かなり地ならしされた形跡があらわれる。

台地上からは 鹿角盆地をとりまく山並がよく見えるが 近くには南方に標高約 206m の軍艦が 北東方に標高 280m の黒又山の独立丘が目につく。また対岸の北方には 標高 545.9m の黒森山を望むことができる。台地のはば中央部には 県道大湯一花輪線が走っており 台地東方を南北に走る大規模農道が 風張付近を通過し台地下に下る予定になっている。

調査区の地質については 近くの山砂利窓や現場の露頭で観察することができる。それによれば 下位から十和田浮石層 次にその二次層 そして表部堆積層と大別される。

表部堆積層は 各トレンチ及びグリットに於ける観察から 上部から表土層 大湯浮石層 黒色土層 赤黒色土層 薄石及び細角礫を混入する黒褐色土層 下位火山灰層に細別することができる。

表土層は 厚さは20~30cm を有し モミガラや火山灰の混在した湿土層である。大湯浮石層は 淡黄色の中~粗粒火山砂で 大体10cm前後の厚さを有するが 表上の耕作が本層にまで及び欠除している場合もある。次の黒色土層は 5~30cmの厚さを有し や 粘質の黒色土壤であり 上位の浮石層の基底に混入する。赤黒色土層については や 粘質で 固くしまっているのが特徴で タリットにおいてのみ観察され その他の地点では認めることができなかった。

遺物包含層は 大湯浮石層直下の褐色土層で それ以外の層での遺物の発見は 全くなかった。また表土の表面に散布する遺物は 耕作が遺物包含層にまで及んでいたため 表面上に掘り起されたものであって 表土に遺物を含むものではない。

### III 調査

調査は前述のように 6月15日より10月31日までの期間であった。一部発掘調査以外は 表面採集 ポーリング調査および小トレンチ（坪堀り）によった。

以下分布調査 発掘調査の順に記述する。

#### 1 分布調査 (Fig. 1(a)(b))

調査予定地域全域について 土・日曜日を利用して調査を行った。前年度と同様 全域は厚く大湯浮石層に覆われており 深く起耕しない限り遺物は地表に現われない。かりに現われたとしても耕作の都合上取り片づけられる。このため結果的には 坪堀等の調査以外には 多く期待できなかつた。

#### A 地区 (大湯字万座48の1)

2m×2mの坪堀りを6箇所 2m×5m のトレンチ 2箇所合計44m<sup>2</sup> を任意に設定して調査した。現地は果樹園（リンゴ）であり 一部攪乱された部分もあったが 土層は全体的に他とあまり変化なかった。

遺物の出土はなく 遺構の検出もみられなかった。ただ西南に 四角形に空塗をめぐらした縦状遺構があったが すでに砂利採取により破壊され わずかに空塗の土手の一部が残っているだけであった。

発堀した部分はほんの一部であり これによってA地区全体を同等視されはならない。特に段丘端 および B地区に近い範囲は注意を要する。

#### B 地区

全域に遺物の散布がみられ 特に指定地に接近するほどその量も多い。

なお北東部については 後日報告される「鹿角大規模農道調査報告書」にも一部記載される。

#### C 地区

一部発堀調査を実施した地域であり B地区とともに 遺物の包含も濃く 遺構の存在が確実に予測される。最重要地区である。

#### D・E・F地区

本年度十分な調査はできなかった。しかし F地区の指定地に隣接する地域には 環状列石の一部と思われる石が出土しており 周辺からの遺物出土の情報もある。

#### G 地区

発堀調査の部に記述する。

調査予定地は 200,000 坪という広大なものであり 5ヶ月という長期間ではあったが 十分満足できるものではなかった。これは一偏に 調査員の臂力以外の何物でもない。できれば明年度以降に於ても 部分的にでも調査を継続してほしい。

不十分な調査ではあったが あえて結論的なことを言うなら 現指定地を中心に半径300m以内の範囲は 保護地区としての行政措置を講じてほしい。

## 2 発堀調査 (Fig. 1 (b))

発堀調査は いわゆる万座地区で行われた。予定地の現状により グリット法とトレーニング法を採用した。以下調査日誌を中心に グリット地区とトレーニング地区に分けて記述する。

### 1 グリット地区 (Fig. 2 PL 13(a)b))

7月20日 (土) 晴

万座遺跡の西側 大湯字万座23番地にグリットを設定する。 磁北を基準に12m×12mの計144面とし さらに2mに区切り49グリットとした。1から7を南北とし AからGを東西により 南東隅の杭をもってグリットを呼称することにした。

7月21日 (日) 晴

発堀用具一式を 上和田営林署種苗事業所資材保管倉庫に搬入。十和田高校生 宿舎となる大湯分校清掃。桂高校生午後 中村旅館に全員到着。午後7時より大湯分校にて 調査についての連絡および打合せを行う。

7月22日 (月) 傷のち小雨

女子全員にてグリット内の表面採集。 同時に男子6名は 5A～5Fに土器観察用のあぜを巾80cmで掘り下げる。表面採集後 女子は3人1組とし 1グループで4グリットを持たせる。全員で表土を除上。

上層観察用あぜの5C～5Dにかけて 大湯浮石層下-16cmに土器片・石器出土。表土を全域剝離した結果 1E・2D・3C・4B・5Aを斜めに横切る南東側および7Aには 長年月に渡る深い耕作のため 大湯浮石層の堆積がない。

大湯浮石層を除くと 土器片が散在的に出土する。7Aに台付土器が出土。(PL 13(b)4)・7Dおよび3F～4Fに 長柱状の石が出土。7Dの石は57cm×23cmであり 3F～4Fは50cm×12cmと64cm×13cmの2ヶで ともに北東方向に長軸をむけている。特に7Dの石は 大湯浮石層直下に上面があった。

全体的に大湯浮石層の堆積は 南西方向にいくぶん厚いように思われる。

7月23日 (火) 傷のち雷雨

昨夜の雨で全城が水浸しである。

各グリットの剝土を継続する。土器観察用のあぜは 東西に2本 南北に1本のみ残して他は除去。全面発堀にする。

3C・4D・5Dに土器が散布状に出土する。特に4Dには多い。4Dと5Dの中間付近に 大

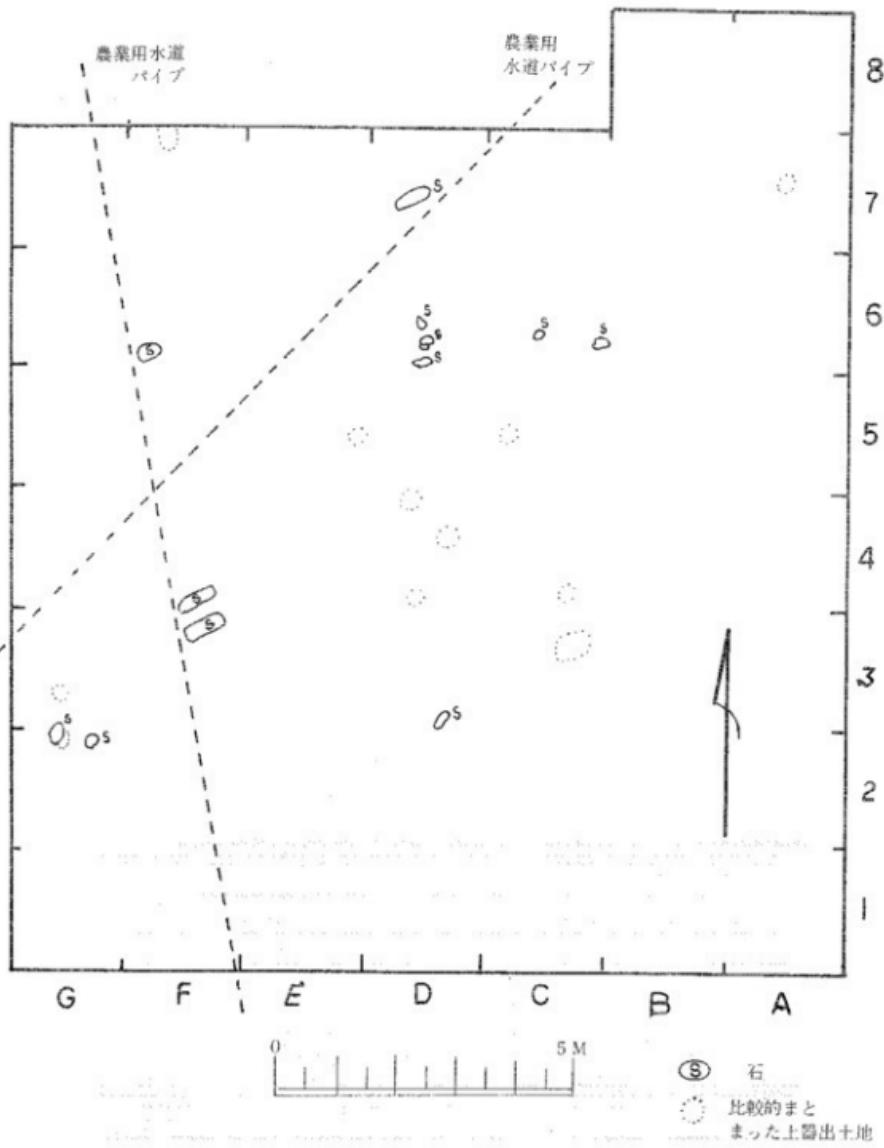


Fig 2 グリット地区実測図

形壺と思われる土器が下半部を欠いて 上からの圧力で押しつぶされ 四散したような状態で出土した。 (PL13(a)5)

前日出土した 4 F の石は 他のグリットのレベルより低い位置にある様に思えるが この付近に於ける大湯浮石層の堆積は 他よりもいくぶん厚い。あるいは当時の文化面は 南西に緩く傾斜したものであり 表土より -20cm ないし -25cm であったと考えられる。

平板測量を開始。午後より雷雨襲来。遺物にはビニールシートをかぶせ 土をのせて本日の作業を終る。

#### 7月24日(水) 晴

耕作により攪乱されている 2 B を 下位下山灰層までの深さを把握するため 1 m × 1.5 m に掘り下げる。遺物の出土なし。表土より下位火山灰層までは -88cm をはかる。

3 G 中央に中形の浅鉢出土。 (PL13(b)5) 3 F・4 F の長柱状石より 少し位置が低い。 3 G 南壁にくいこんだ状態で 壺と思われる口縁部が出土。上に平石がのせられている。(PL13(b)3)

3 G - 4 F・5 G - 7 G に 灌漑用水道パイプ出現。布敷のため約40cmの巾で攪乱されている。

3 F - 4 F の石に接近しているが 石が動かされた形跡はない。 (PL13(a)4)

#### 7月25日(木) 晴 曙さ厳し

7 A - 7 C は 下位火山層までの削土完了。遺構の検出なし。5 C の土層觀察用あぜ南側 表土より -45.0cm 大湯浮石層より -18.0cm に 石に押しつぶされた様な状態で土器が出土。 (PL13(b)2)

全域とも遺物の出土が少くなる。午後より全グリットを 下位火山灰層まで平均的に下げる。5 C のあぜより南側は黒土が厚く 下位火山灰層までの深さがあるかに思われる。遺物包含層は第1層と仮称した層中に限定されるようだ。



PL.4 グリット土層図

7月26日（金） 晴

全グリットの下位火山灰層までの剝土終る。遺物の出土、遺構の検出なし。午後より土層観察用のあぜを 5C-5G・3F-8F に 2 本残し、他は埋戻し作業を行う。

7月27日（土） 晴

田村調査員一般土層図作成作業。

十和田グループ 7A・7B の北 8A・8B の 2 グリットを拡張する。7A・7B と同レベルより 土器片および石刀の一部と思われる石器出土。（P.L. 12(a)1） 今回調査地域の北側にも遺物包含層を確認する。下位火山灰層まで剝土。

桂高校グループ レンチ発掘地区に移動。拡張レンチを設ける。午後 7 時より中村旅館にて反省会。

7月28日（日） 曇

午前中全員で埋戻し作業。発掘地を現状に復した後、用具確認・整理の上帰宅の準備。11時30分調査の終了を指示。桂高生夕刻帰校。

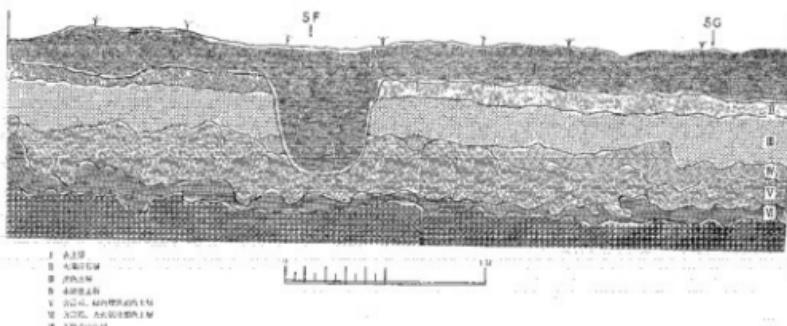


Fig. 3a グリット土層図 (5F-5G)

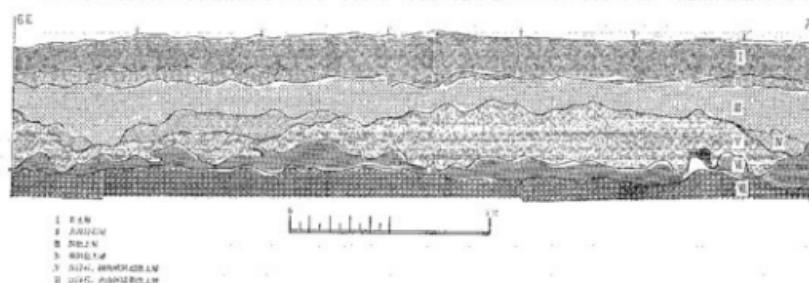


Fig. 3b グリット土層図 (6E-7E)

## 2 トレンチ地区 (Fig. 4 PL 14(a)(b)(c))

7月21日 (日) 晴

午後よりトレンチ設定。調査予定地は 大湯字万庫22の1番地である。果樹園の中の畑に 12m × 3m をとり、長辺をさらに 3m に区切り 4区とする。

7月22日 (月) 曇のち小雨

桂・十和田高校女生徒 5名で I・II区の表土を除土。大湯浮石層の堆積がみられない。耕作により他へ除去されたものと考える。

両区ともに表土から -15~-17cm で 多量の土器片が散布状に出土。堆疊ではあるが大湯浮石層の直下と思われる。

### I 区

南西隅に 少量の木炭とともに深鉢が倒れた状態で出土。(PL 14(a)2) 中央に長さ30cm程の柱状の石と その北東側に土器が押つぶされた状態で出土した。

### II 区

全体的にまとまった感じで土器の出土多い。北東側に 30cm×25cm×7.0 cm の扁平な石が出土。その石を中心に北東側には 大形深鉢の破片と 2個の土器底部が 底を上にむけて 小型台付土器<sup>(1)</sup>の台の部分とともに出土した。(PL 14(b)2) また 反対(南西側)側にも大型破片が出土した。石の位置よりは -5cm ~ 7cm 位低い。北東側のや、中央寄りには 完形の小型壺が他の土器の底部にのって出土した。(PL 14(b)5) まわりには 拳大の石が多く 例の扁平石(以下平石という)との関連があるのでないか。土偶の右爪先が出土。(PL 14(b)3)

果樹園への農薬散布により しばしば作業中断。午後降雨。

7月23日 (火) 曇のち雷雨

昨日に引き継ぎ I・II区の調査继续。

### I 区

中央付近に焼土・灰が出土する。昨日のトレンチ壁の深鉢より 北東に 40cm 位。精査の必要あり。北東隅に散布状に土器出土。

### II 区

土器の出土状態は 石との何らかの関連を強く感じさせる。昨日の平石南西側 大破片の下に浅鉢出土。完型壺出土地点の周辺は 下に拳大の壺のあることがボーリングで確認できる。細心の注意で削上を指示。

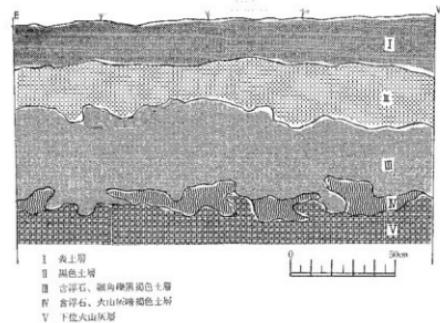
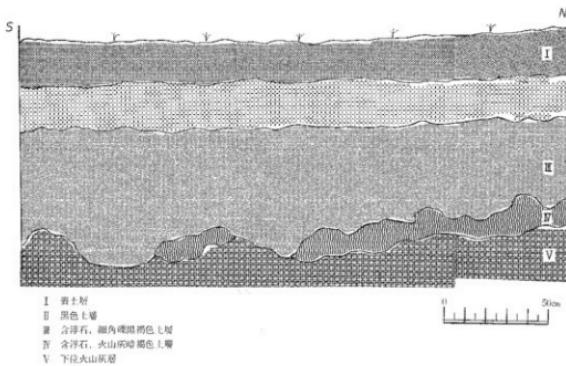
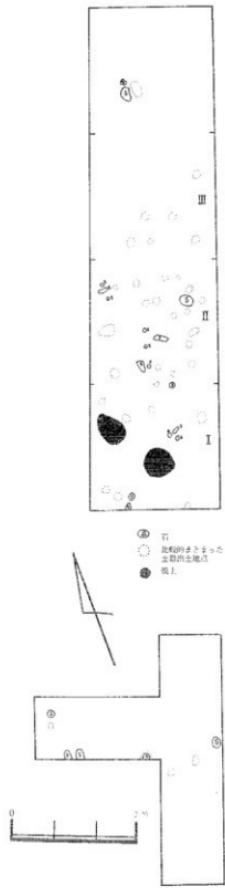
中央より少し西側に 長軸を東西方向にして 2個の石 (31cm×11cm・14cm×12cm) が出土。周間に土器の出土多い。午後より雷雨調査打切り。

7月24日 (水) 晴

### I 区

焼上及び灰を精査する。ともに表上下 -47cm であり 南側の焼上(以下焼土1とする)は 黄色っぽい感じ 北側(以下焼土2とする)はやや赤味が強い。焼土1の西南には 直径20cm程の丸石が 4個 ほぼ等間隔に あたかもがの一部の様な感じでとりまいている。焼土の底面より下のレベ

(1) 原元の結果これは同一個体であった。



ルには 遺物の出土なし。Ⅲ区に作業を移動。

## II 区

あいかわらず土器と礫大 ないしはそれ以下の礫の出土が多い。I・II区の土層観察用あぜを取り払う。表土より-50cmに完形壺出土。(P L 14(b)6)

土器と礫との出土状態は 混在していると言ってもいいすぎではない。土器の周囲を上下に取り囲む状態だ。これは意図的なものであろう。飛躍した推論とは思うが 例の平石を中心に2乃至3重の土器と礫との輪がある程度の間隔をもって形成されるのではないだろうか。平石のレベルよりも-20cm平均である。

7月25日(木) 快晴

## I 区

焼土1・2を精査。焼土1は 上面が72cm×64cmほど円形である。堆積は外周が3.5cm 中央部は2cmであり あえていえば南側に厚く堆積されていた。また中央部には 少量の土器片が混在していた。

焼土2は 80cm×60cmと橢円形に近い。堆積は4.0cm・6.0cm・3.5cmと中央部がやや厚い。

## II 区

中央部を縦に区切るように 径15~20cmの丸石が3個並んで出土。北隅に近く土偶出土する。遺物の出土量少くなる。下位火山灰層までの削土を行う。

I・II区で共通して言えることは 例の平石のレベル以下では 前述のように土器と礫の混在と言える。と同時に 土器の上半部乃至下半部が無傷で出土するが 同一個体と思われる破片がみられないことだろう。

## III 区

表土下16cm~17cmで遺物出土する。しかし 量は前2区程ではない。

表土より-50cmに完型の小型壺-(P L 14(c)1) 及び小型磨製石斧出土。

小型の壺の出土は 前出の2個と関連があるのだろうか。3個の壺は ともに口縁を北に向けて倒れ や 等間隔で出土した。仮にこの3個の壺を結ぶと その方向は N 2° 30' E となる。そして何故に小型壺のみが完型で出土したのだろうか?

7月26日(金) 晴

I・II・III区に遺物の出土とされる。午後からII・III区の地区杭を中心に 横に巾40cm縦に巾1mのU型の溝を 下位火山灰層まで堀り下げる。下位火山灰層まで表土より92cmをはかる。

## IV 区

表土を除去する。大湯浮石層が表土下27cmで約7.0cmの厚さに堆積している。

中央よりや・南西-32cmに 37cm×21cm×5cmの軽平石出現。石の東側に I・II・III区と同様の状態で土器片出土する。注口土器及び石鏃2個出土。(P L 14(c)2・3)<sup>(1)</sup> 他に遺構らしき跡発見できず。

(1) 現場にて特にいねいに収納するも 小休止後袋ごと行方不明になっていた。

7月27日(土) 晴

II区を下位火山灰層まで全面掘り下げ。遺物の出土・遺構の検出なし。土層削作成後 全区を埋戻す。

午後より桂高校グループ 旧トレンチの南西側に 6.0 m × 1.5 m・4.00m × 1.5 m のトレンチをT字型に設定。(以下全体をSTとし 南北方向をI区 西側をII区と呼ぶ)

### ST I区

大湯浮石層下-18cmに 扁平な石とその周間に土器片出土。

### II区

南壁にくいこんで復元可能な深鉢が出土。底部を上にむけ 石で倒われ押しつぶされた状態である。(PL 14(c)5・6) その西側には 環状列石に使用されていると同程度の石が 2個トレンチ壁にくいこんで出土。(PL 14(c)4) 拡張の必要あるも 日没のため土器はナイロンで覆い薄く土をのせて作業終了。

7月28日(日) 雨

### I区

遺物の出土少し。

### II区

南側を巾30cmで拡張。昨日の土器収納。中央内壁に近く扁平石(約25cm×15cm)出土。風雨が時折強く襲う。ビニールコートを着て作業するも 全員ドブネズミの如し。蚊の猛襲に苦しむ。午前中で遺物を収納し埋戻す。

### A・G地区 (Fig 16 PL 2)

大湯環状列石周辺の航空写真をみると いわゆる万座・野中堂遺跡を中心とした現指定地の周辺に 性格不明な小さな円が数個所白く浮き出ている。それが 環状列石に関係するものか...他の遺構の存在を現わすものかわからなかった。昨年度の分布調査の際にも話し合われ 今年度は一部発掘調査に組み入れた。

### A地区

7月26日(金)

大湯字万座51番地の落葉松植林地に 3.0 m × 1.5 m のトレンチを東西に設定。小和田営林署苗畑の隣接地であり 若干の高まりをみせている。周囲には 大湯浮石層及び軽石状の小礫が 表土に多量に混じていた。他地域に比べて その相違は一見して区別できる。トレンチ内には 大湯浮石層が厚く堆積しており 表土より下位火山灰層までは 以外に黒土は厚く1.20m あった。遺物は 破片1つ出なかっし 遺構の存在も確認できなかつた。

## G 地区

8月2日(金)　暴時々小雨 (Fig. 1(b)) Fig. 6 PL. 5)

大陽字野中町22番地の十和田宮林署苗畠に、8m×5mのトレンチを南北に設定。  
表土除土。大馬浮石層が堆積している。下位次山灰層まで剝土するも、遺構の出現なし。  
一般土層図を採り廻す。

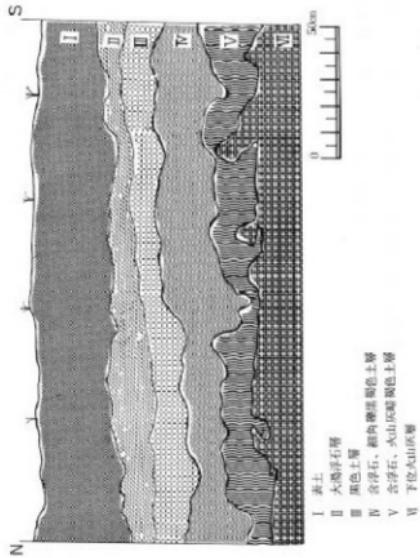
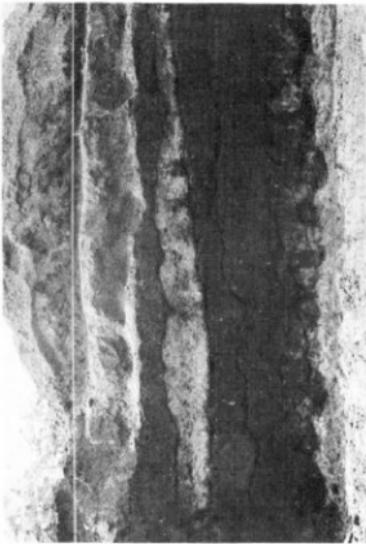


Fig. 6 G地区土層図 (N-S)



PL. 5 G地区土層図

以上2箇所の小発堀の調査ではあるが 中間的な意味を含めた結論を許されたい。

発堀調査した2箇所以外に 航空写真をもとに 諸端すると思われる地点を踏査した。その結果得られたものは

- 1 ポーリング調査による遺構の存在は 確認できなかった。
- 2 平均して下位火山灰層までの黒土が薄い。
- 3 他の地点に比して 特に大湯浮石層及び軽石状小礫が 表面に散布され 明らかにその相違は確認できる。
- 4 各地点は 若干の高まりをみせている。

以上のことから原地形は 周囲より比較的高い部分であり 純地として整地の際 平均的に削平されたのだろう。このため大湯浮石層のみでなく ある部分では 下位火山灰層までも削られ 白く浮き出てみえるものと思う。これは多分に推定の域を出ない。今後とも継続調査をしたい。

#### IV 出 土 遺 物

##### 1 完型・復元土器 (Fig. 7(a)~7(d) PL. 6(a)~6(d))

Fig. 7(a)から7(d)までは 完型または大部分を残す深鉢及び浅鉢である。Fig. 7(c)の1 Fig. 7(d)の4はグリットから Fig. 7(d)の3はSTトレーナーからの出土であり 他はすべてトレーナーからの出土器である。

###### Fig. 7(a)の1

いわゆる大湯式土器であり大きい。口縁部と胴部の2段に 曲線文がつけられ 胴部上限及び下限を平行沈線で区切る。沈線で左斜めの繩文をつつんでいる。

口径29.0cm 高さ33.0cm 底径11.2cm 色沢は灰褐色である。

###### Fig. 7(a)の2

口縁擦り消し 胴部は右斜めの繩文だけの壺で 口径11.8cm 高さ26.4cm 底径9.8cm 色沢はやや黄色。

###### Fig. 7(a)の3

6つの頂部に 2個の刻みを持つ山形突起のある壺で 口縁部及び体部は右斜めの繩文で飾られる。

口径23.0cm 高さ29.8cm 底径10.4cm 色沢は灰黒色。

###### Fig. 7(a)の4

2本の沈線をくびれた頭部に飾る壺で 左斜めの繩文がある。

口径21.2cm 高さ31.2cm 底径8.5cm である。色沢は灰褐色。

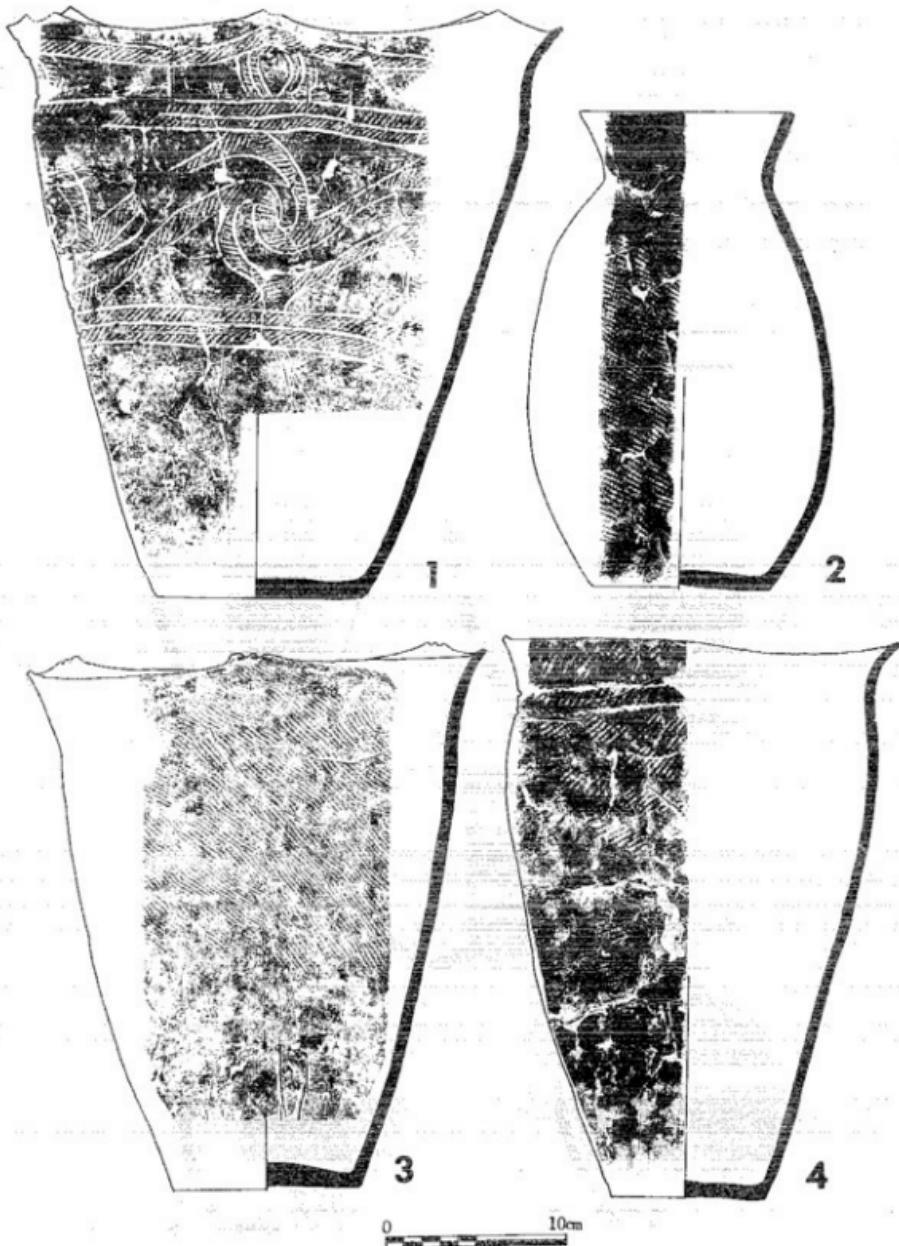


Fig 7 (a) トレンチ出土土器実測図

Fig. 7 (b)は中央3の浅鉢の他は底径が口徑より大きい大湯式独特の型を示している。1は無文の壺。2も無文の小型壺である。3は無文の浅鉢。4は大湯式の文様を3本の沈線で描いた壺で口縁部の型は特色がある。3つの突起がある。5は頸部に3本の沈線をめぐらし、胴部は繩文である。

1は口徑11.5cm 高さ20.8cm 底径10.7cm 廬黑色。2は口徑6.0cm 高さ10.9cm 底径6.8cm 黄褐色。3は口徑20.5cm 高さ10.5cm 底径5.5cm 色沢は灰褐色。4は口徑5.5cm 高さ15.2cm 底径6.2cm 廬褐色。5は口徑4.2cm 高さ12.6cm 底径5.5cm えび茶色である。

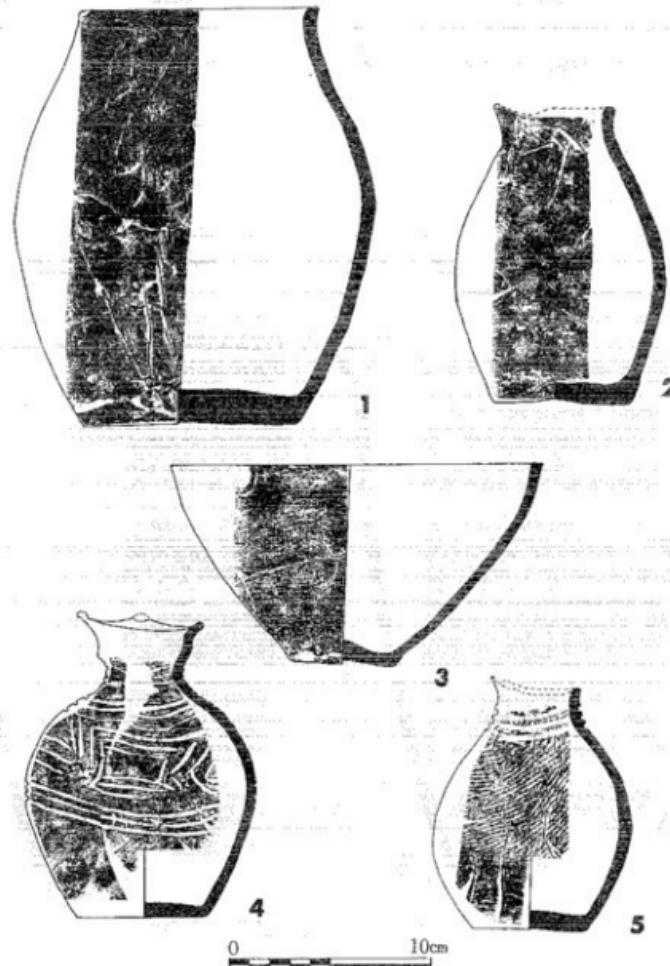


Fig. 7 (b) トレンチ出土土器実測図

Fig. 7(c)には おもしろい器型のものが多い。1は台付の浅鉢で 文様は大湯式である。口径15.7cm 高さ11.5cm 底径8.0 cm 色沢は黄白色である。2は注口土器であろうが 文様は特殊なものである。口径8.0 cm 刷径12.5cm 壱高7.5 cm。色沢は灰黒色。3は小型の深鉢。口径11.6cm 高さ10.2cm 底径4.5 cm 黒色である。4は頸に6個の把手をめぐらした壺で 大型である。口径11.6cm。5は口縁部の広く開いた壺で 間隔をおいた2本づつの平行沈線などで飾っている。口径推定12.0cm 高さ約20cmと推定される。色は黄白色である。

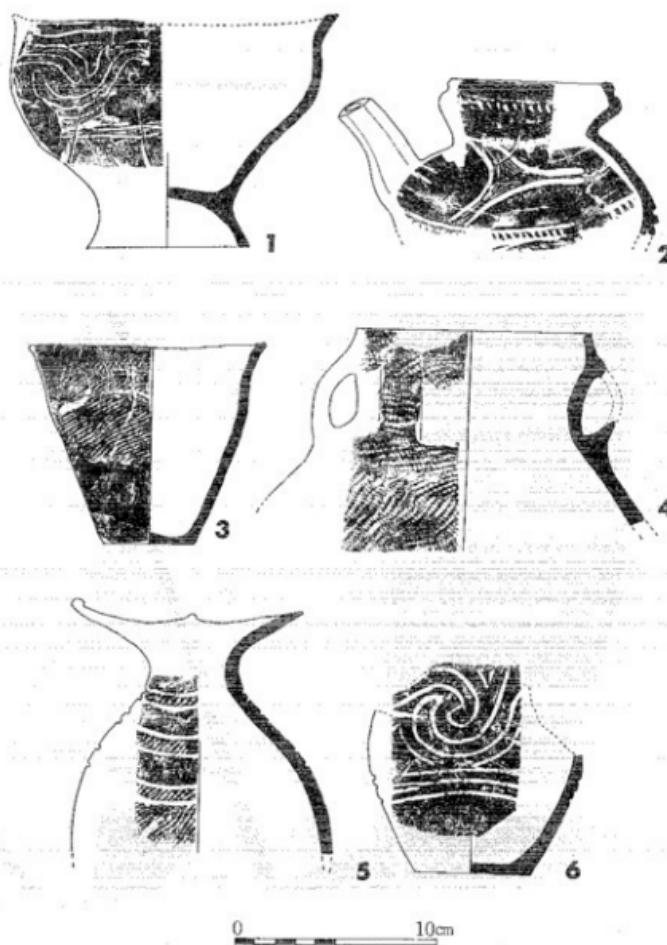


Fig. 7 (c) トレンチ出土土器実測図

Fig 7(d) も壺及び浅鉢で 1は灰褐色の表面及び内部の上方に朱を塗り 下半部の欠けた口  
径推定6.0 cm 植定期高19.0cm位と思われる。2は胴部以下が欠けているが壺であろう。口  
径12.0cm 高さ推定28.0cm 底径推定7.0 cm。色沢は黄灰色である。3は撲条文で装飾され 口縁の  
1部に3個の並んだ刻み目を持つ。器表に煤が付着している。口径28.7cm 高さ30.0cm 底径12.5  
cm 色沢は黒褐色である。4は口縁部が複合し 脇部以下は無文の浅鉢である。口径11.6cm 高さ  
7.9 cm 底径4.2 cm 黒色である。

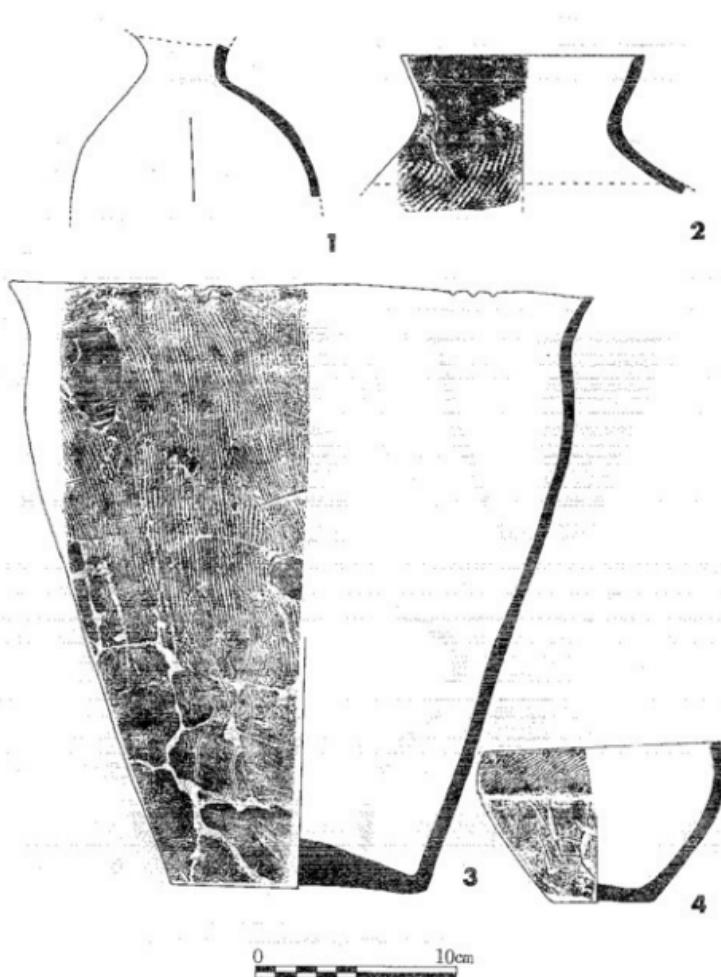


Fig 7 (d) トレンチ出土土器実測図

2 グリット出土土器 (Fig. 8(a)~8(d) PL. 7(a)~7(d))

Fig. 8(a)からFig. 8(d)までは、グリット中の出土土器である。これを簡単に類別すると、器型は臺型が多く、わりあいに施跡は少ない。

大別してFig. 8(c)の7~9とFig. 8(b)の16 Fig. 8(c)1~4 Fig. 8(c)の6 Fig. 8(d)の3・6~9 Fig. 8(b)の7~10 Fig. 8(b)の11 Fig. 8(b)の12・13 Fig. 8(a)の15~17 Fig. 7(d)の4などに分れる。

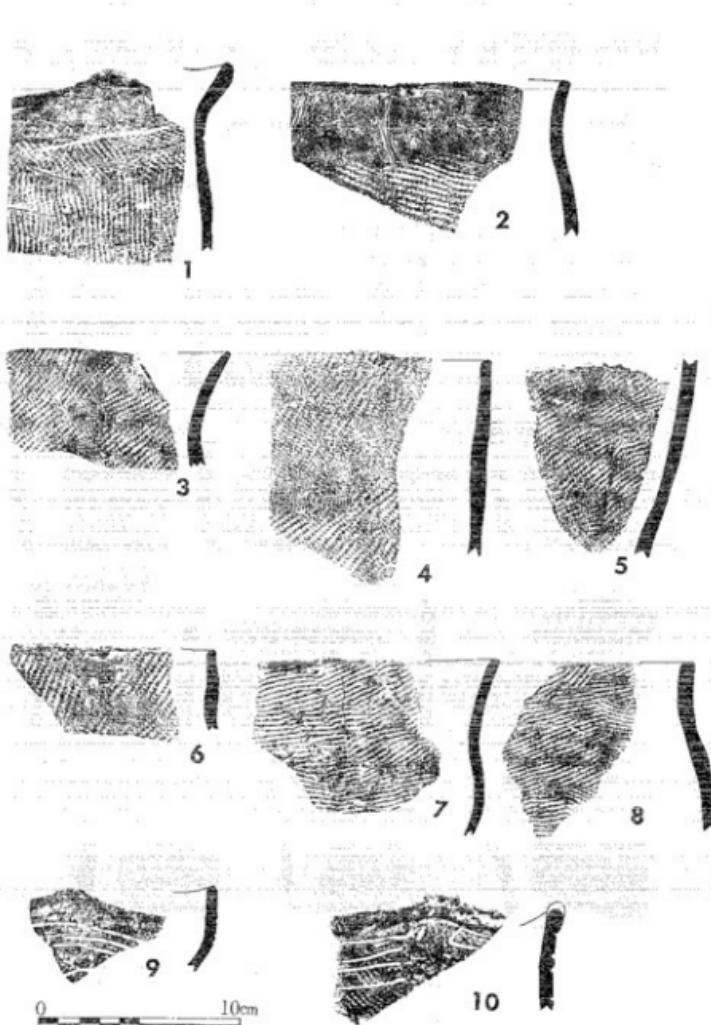


Fig. 8 (a) グリット出土土器拓影

大型の壺または深鉢の底には 繩代目が多く ここでも 4例を示した。

これらは いわゆる大湯式土器とは少し違ったものを含み 特に Fig 8(b)の 4・5 同じく 8・9・12 Fig 8(c)の 7~9 は掘之内式に近い。これらの土器には 隆起が少なく 主な装飾は 沈線による。斜めに繩文を施すものもあるが 沈線や条痕文の中には 地文が磨かれた磨消繩文のものもある。

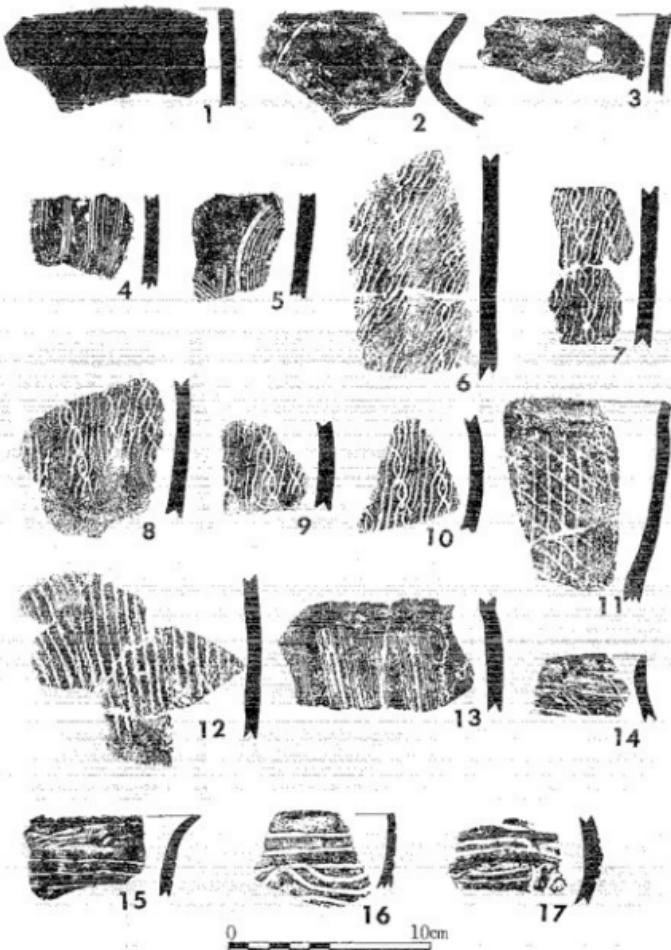


Fig 8 (b) グリット出土土器拓影

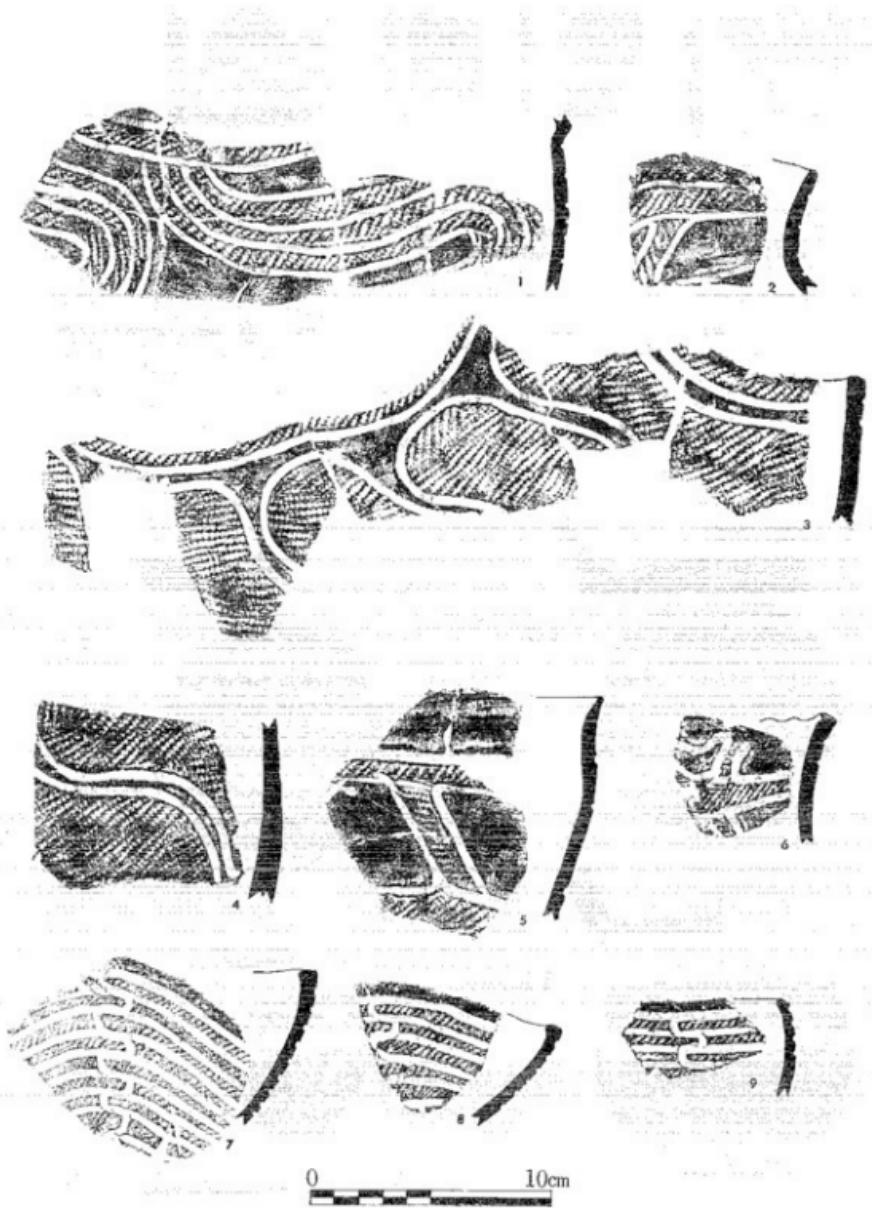


Fig 8 (c) グリット出土土器拓影

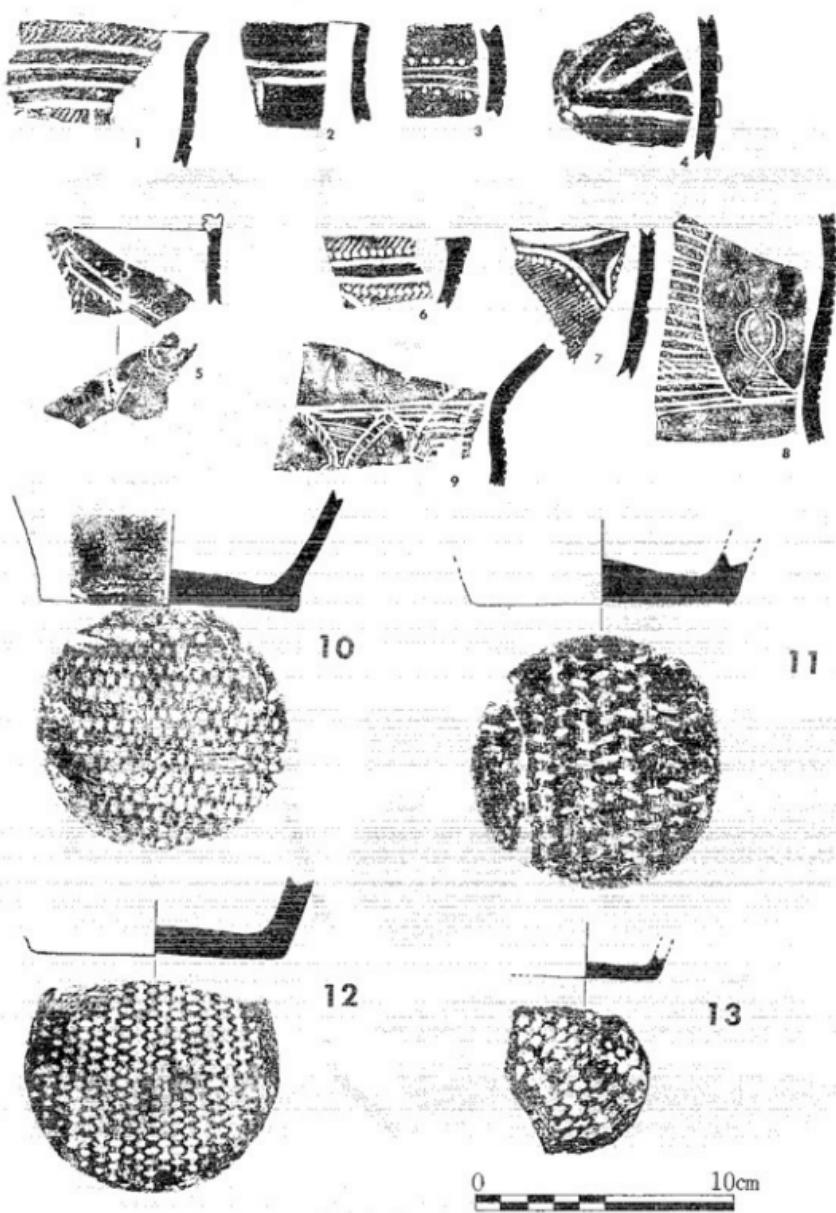


Fig. 8 (d) グリット出土土器拓影

3 トレンチ出土土器 (Fig. 9(a)~(j) PL. 8(a)~(j))

Fig. 9(a)からFig. 9(j)までは、長さ12m巾3mのトレンチから出土した土器の、主なものである。実数はこの数10倍にのぼる。

これを次の様に分類する。

第1類土器 (Fig. 9(a))

無文の深鉢型及び浅鉢型土器である。わりあいに薄く、色澤は暗褐色である。表面に煤の付着をみない。口径は推定20~25cm位である。

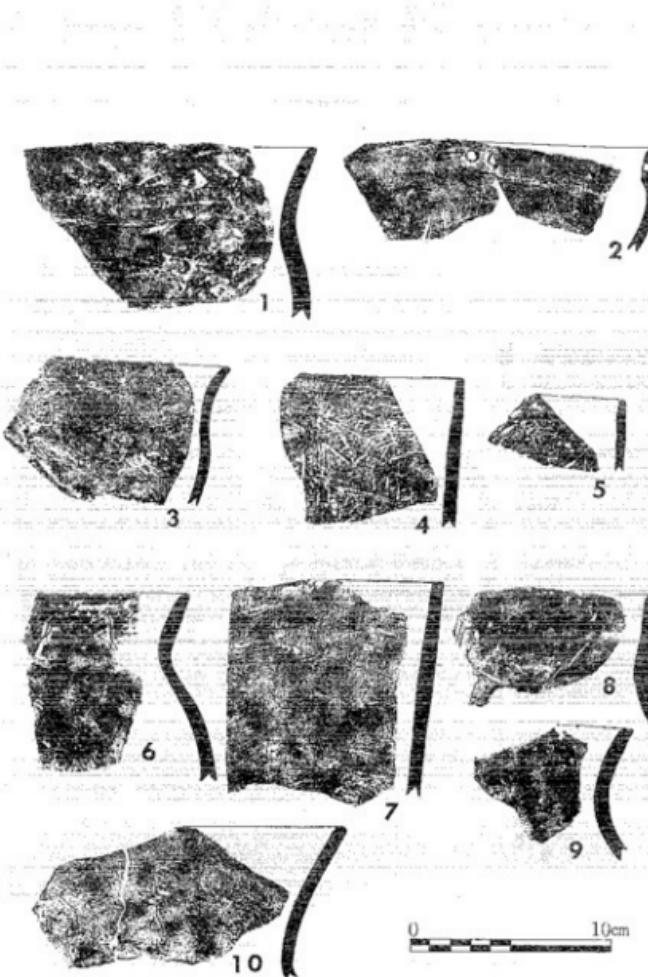


Fig. 9 (a) トレンチ出土土器拓影

第2類土器 (Fig. 9(b)の6~10)

縄の側面圧痕を水平に押した上を 無文の巾の広いU縁部としたもの

第3類土器 (Fig. 9(b)の1・2)

第4類土器 (Fig. 9(b)の3)

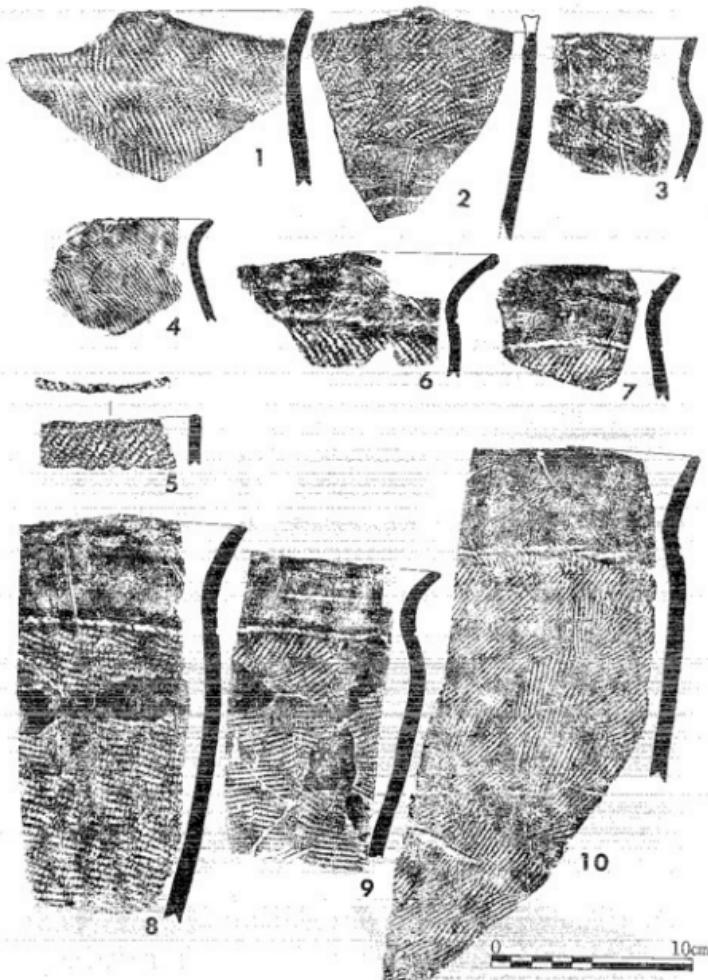


Fig. 9-(b) トレンチ出土土器拓影

第5類土器 (Fig. 9(b)の4)

第6類土器 (Fig. 9(b)の5)

5は口唇部にも縦文をつける。  
いずれも深体型の土器である。

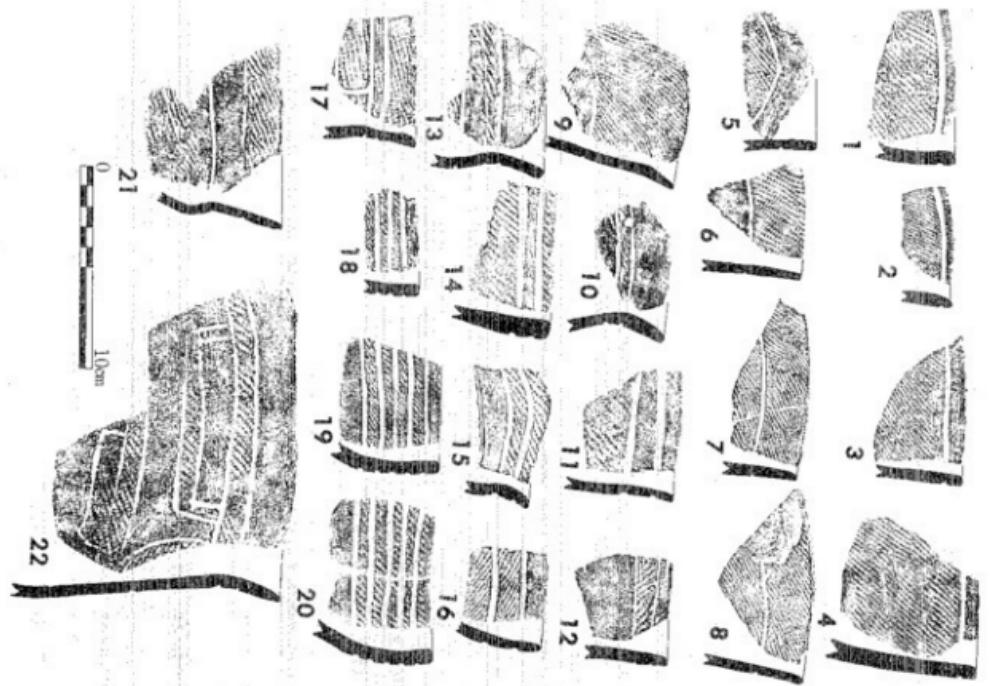


Fig. 9 (c) トレンチ出土土器拓影

Fig 9(c)は 真直ぐな沈線で装飾されたものが多く なかには この類から外れるものもあるだろう。これらを いくつかに分類する。

#### 第7類土器 (Fig 9(c)の1~4・6~9)

口縁に近く1本の沈線を巡らし 体部は繩文だけと思われるもの (1~4)

口縁部と体部のあいだに間をおいて 1条の沈線で 口縁部をつくりだしたもの (6~9) ただし 6と9は他と異なり 口縁の傍に沈線がある。他は口縁に接し 口縁部も体部にもともに繩文がある。

#### 第8類土器 (Fig 9(c)の5・15)

口縁部に平行な曲線沈線を用いたもの。

#### 第9類土器 (Fig 9(c)の11)

や、太目の沈線を用いた土器で 沈線間を擦り消してあるもの。

#### 第10類土器 (Fig 9(c)の10・12・14・15・18など)

沈線間に繩文をはさむもの。

#### 第11類土器 (Fig 9(c)の19・20)

や、太目の数多い平行沈線を 口縁部の周囲に巡らし 沈線間は繩文で飾っている。

#### 第12類土器 (Fig 9(c)の17・21・22など)

口縁に平行な沈線と これに垂直な沈線または曲線で や、文様が图形化したもので いわゆる大湯式土器の特色の一部を表したもの。

Fig 9(d)は 前類のグループに近く ややこしい文様の土器を含むが いわゆる全部大湯式と呼んでいい。すべての土器に 繩文をみることはなく 全部沈線文である。

#### 第13類土器 (Fig 9(d)の1)

平行沈線及び曲線よりなる。

#### 第14類土器 (Fig 9(d)の2)

山形の丸い突起をもつ深鉢または浅鉢で 突起部に約10箇の刺突列点をもつ。

#### 第15類土器 (Fig 9(d)の3)

無文の口縁部に 2本の平行沈線を持つ。

#### 第16類土器 (Fig 9(d)の4)

低い山形の口縁をもち 口縁部に平行な沈線 体部に 2本の沈線による曲線文をもつ。

#### 第17類土器 (Fig 9(d)の5)

口縁部に低い山形突起を持ち 同じく口縁部に山形の平行沈線などを持つ。

#### 第18類土器 (Fig 9(d)の6)

低い山形の突起の外側に 山形の沈線を巡らし その下に 1条の曲線文を持ち 地文に細い斜行繩文を持つ。

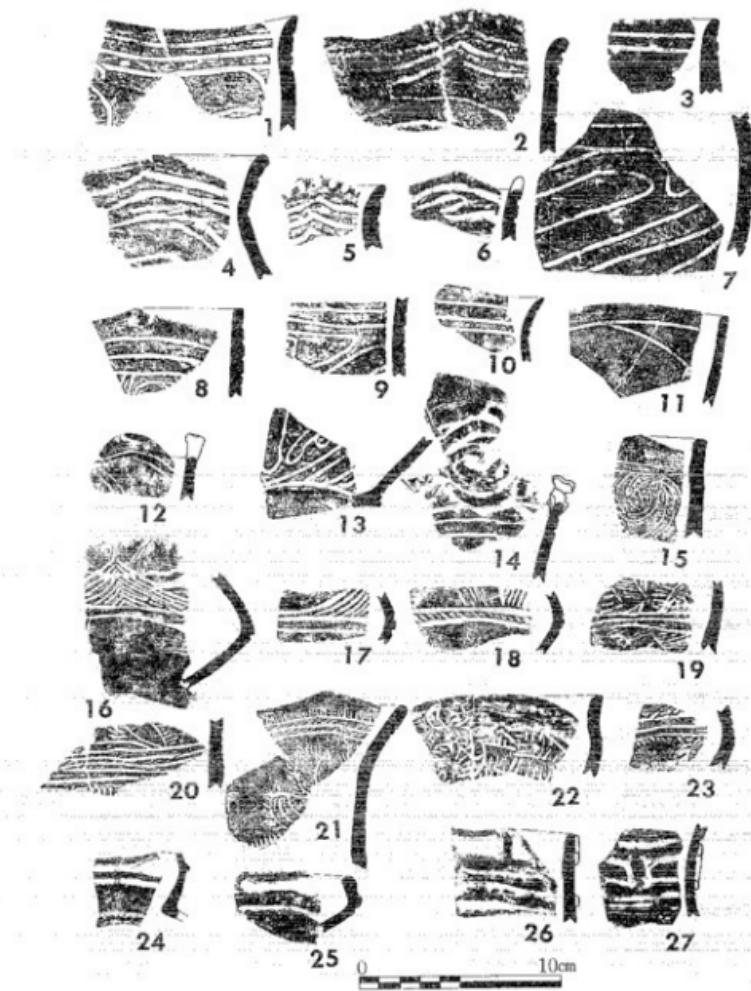


Fig. 9 [d] トレンチ出土土器拓影

#### 第19類土器 (Fig. 9 (d)の 7)

典型的な大湯式土器の1部で、おそらく口縁部以下土器中央部の文様であろう。比較的細い平行沈線を用いて文様を描く。8~10までは同類であろう。

#### 第20類土器 (Fig. 9(d)の11)

よく磨かれた無文の土器で 細い沈線をもって 全体の構図がわからない文様をみせ 他に似た例をみない。

#### 第21類土器 (Fig. 9(d)の12)

斜行する平行沈線をもって描いた口縁部の1部で これもよくわからない。

#### 第22類土器 (Fig. 9(d)の13~23)

平行な沈線及び横目文を 短かい裝飾沈線をもって飾った文様がみられるが この類にも3類別が必要であろう。

#### 第23類土器 (Fig. 9(d)の24・25)

あるいは別に類別出来るかもしれない。

#### 第24類土器 (Fig. 9(d)の26・27)

単純な大湯式に属するものかもしれない。

Fig. 9(e)はあまり差がない。それでも簡単に分類してみる。

- 1 太い沈線を用いるもの。
- 2 中細の沈線を用いるもの。
- 3 細い沈線を用いるもの。

#### 第25類土器 (Fig. 9(e)の1・2)

ていねいな細い繩文と やや細い沈線でつくられ 磨消部分はていねいに磨かれている。いわゆる大湯式である。

#### 第26類土器 (Fig. 9(e)の3・7)

あるいは2つに细分されるかもしれないが これに入れておく。

#### 第27類土器 (Fig. 9(e)の4~6・8~12)

別に類別されるものかもしれない。

#### 第28類土器 (Fig. 9(e)の13~17・20・21)

いわゆるウサギの耳型の文様を特色とする。沈線間には繩文がある。19の如きは むしろ第25類に入るであろう。

Fig. 9(f)は 繩文よりも撚り糸文 条痕文を多く表したものである。

#### 第29類土器 (Fig. 9(f)の1・2)

撚糸文が明瞭である。

#### 第30類土器 (Fig. 9(f)の3~8)

籠状工具によるとと思われる 斜位の格子目文だけである。



Fig 9 (e) トレンチ出土土器拓影

第31類土器 (Fig. 9(f)の9)

同図の11の単純な撚糸文で、連続8の字状文様をつくったものを、5本ほどの撚糸文でつくったもの。

第32類土器 (Fig. 9(f)の10・12・13・16・18)

10は 表はほとんど縦の撚糸の押型文であり、裏は撚糸工具で水平に削っている。これらの中には文様の種類につき、別の分類をされるものがあるだろう。

**第33類土器 (Fig. 9(f)の19・20)**

むしろ先出の Fig. 9(d)の4に似ている。

**第34類土器 (Fig. 9(f)の21・22)**

これはむしろ Fig. 9(d)の16～20に類するかもしれない。

**第35類土器 (Fig. 9(f)の23)**

条痕文の壺型 または 深鉢型土器の口縁であり その裏側には 水平の条痕がみられる。しかし この条痕は むしろ15のものに類似する。

**第36類土器 (Fig. 9(f)の24)**

壺と思われる土器の体部である。細い繩文を円形に擦り消し 上下に三角型の部分を残している。

**第37類土器 (Fig. 9(f)の25)**

無文の浅鉢である。

Fig. 9(g)は刺突文を特色とする。

**第38類土器 (Fig. 9(g)の1～12)**

擦り消繩文もあり その中の最も大きいのが9である。12は繩文がみられない。

**第39類土器 (Fig. 9(g)の13・14)**

器表には 不規則に竹管による刺突文がみられる。

**第40類土器 (Fig. 9(g)の16・17)**

平行の沈線で繩文の地を区切り 口縁部にはみがきがかけられている。

**第41類土器 (Fig. 9(g)の18)**

体部表面及び裏面の口縁部に 繼続した波形貼付文がみられる。

**第42類土器 (Fig. 9(g)の15)**

相対する左右からの沈線による長い文様の真中を 垂に竹管による刺突文が施されていて 18とともに器面が粗い。

13以下は 加賀利式等に属するものであろう。

Fig. 9(h)は や、大型の壺である。あるいは 他の突起部の耳型の裝飾が つけられているかもしれない。

**第43類土器 (Fig. 9(h)の1・2)**

耳型の裝飾をもつもの。

**第44類土器 (Fig. 9(h)の3・4)**

体部の文様がかなり違うが 同期としても良いであろう。

3は推定口径25.0cm 推定高さ30.0cm

4は推定口径20.0cm 推定高さ25.0cm

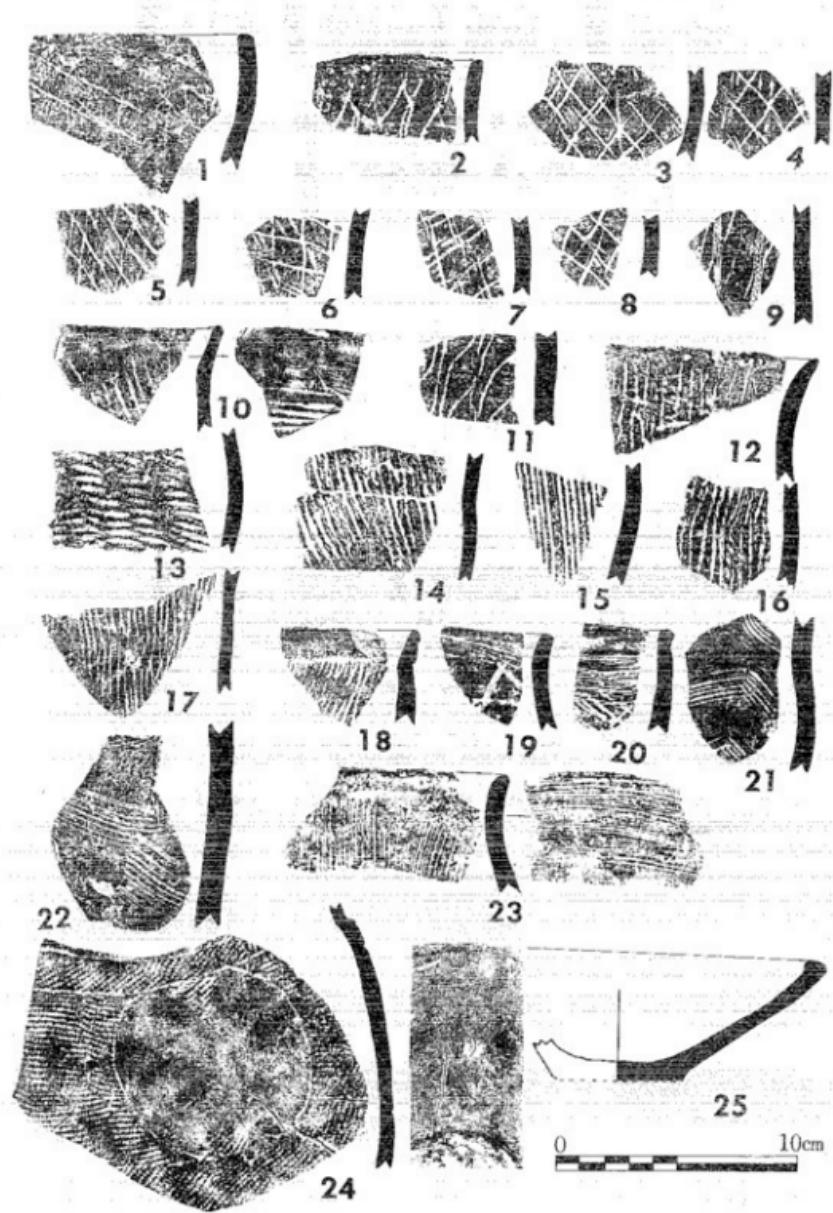


Fig 9 (f) トレンチ出土土器拓影

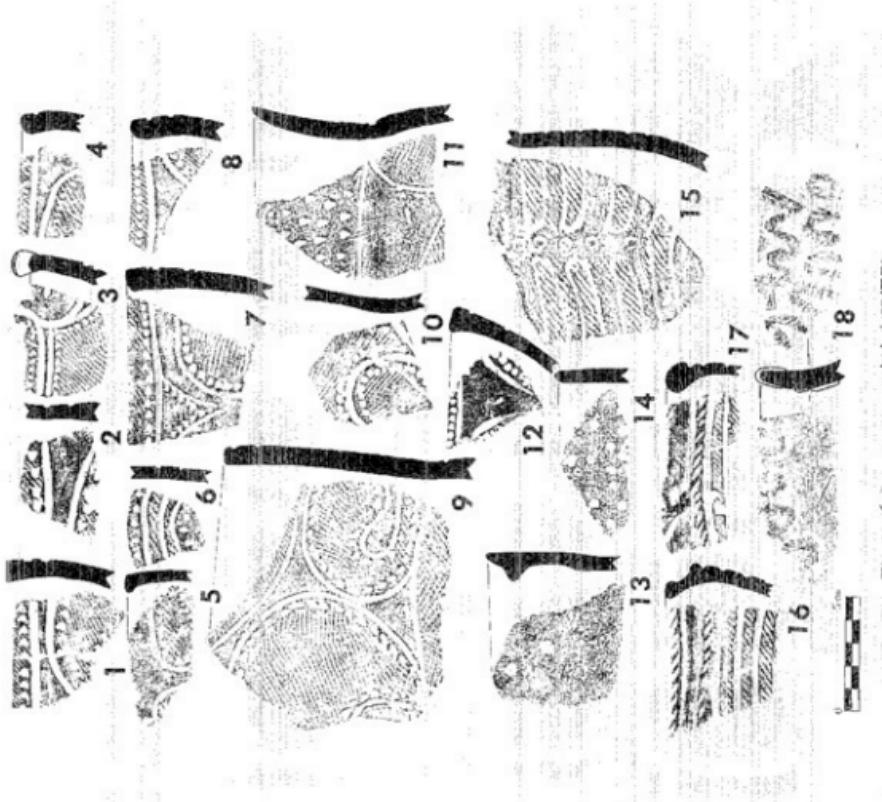


Fig. 9 (g) レンチ出土土器拓影

Fig. 9 (g)は、突起部の突起を表わす  
1から8までは、あまり特殊なものではなく、なかにはこの付近でしばしば拾われる三角形石製  
品と似たものもある。

9から11等は、普通なものであるが、12-13までも同様であり、時期は、いわゆる大治式よりや  
やさかのほどと考えられるものもある。

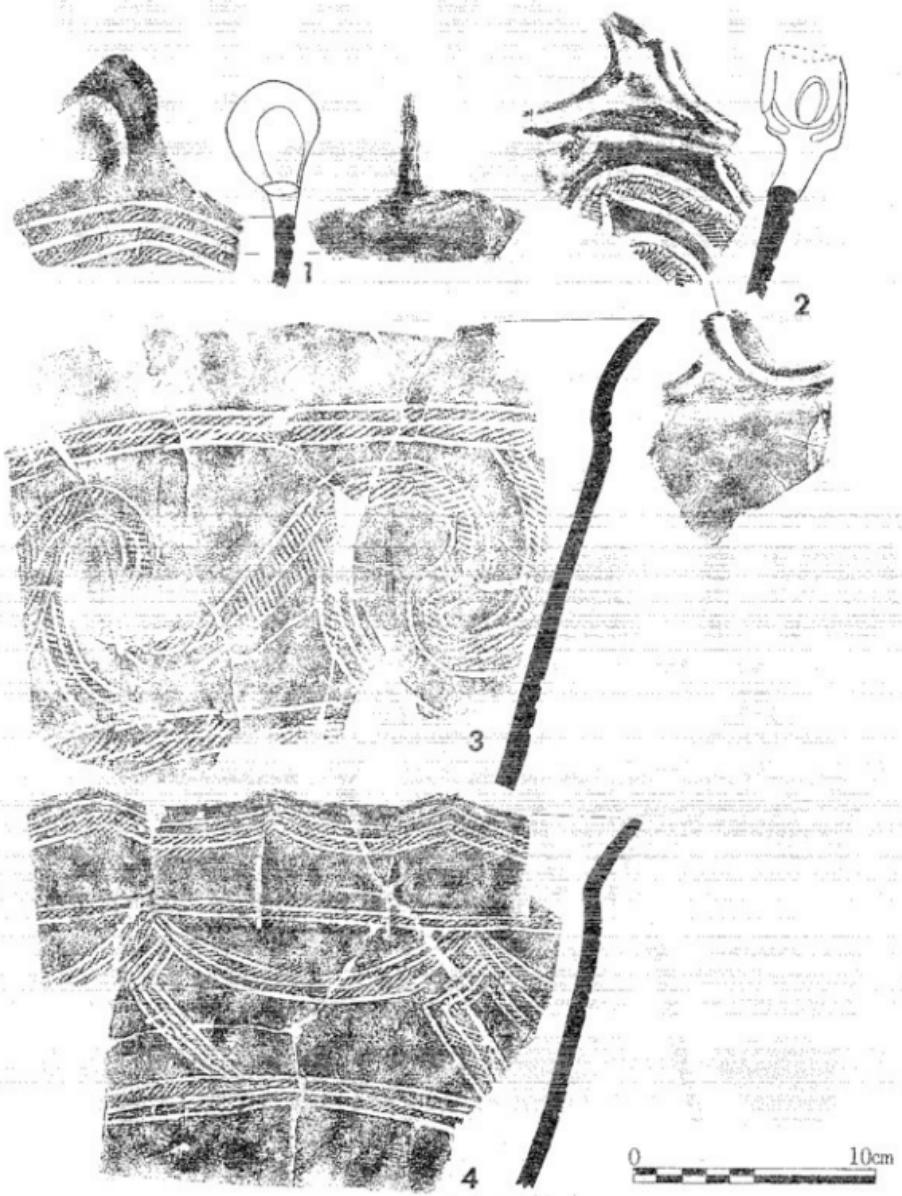


Fig 9 (h) トレンチ出土土器拓影



Fig 9 (i) トレンチ出土土器拓影

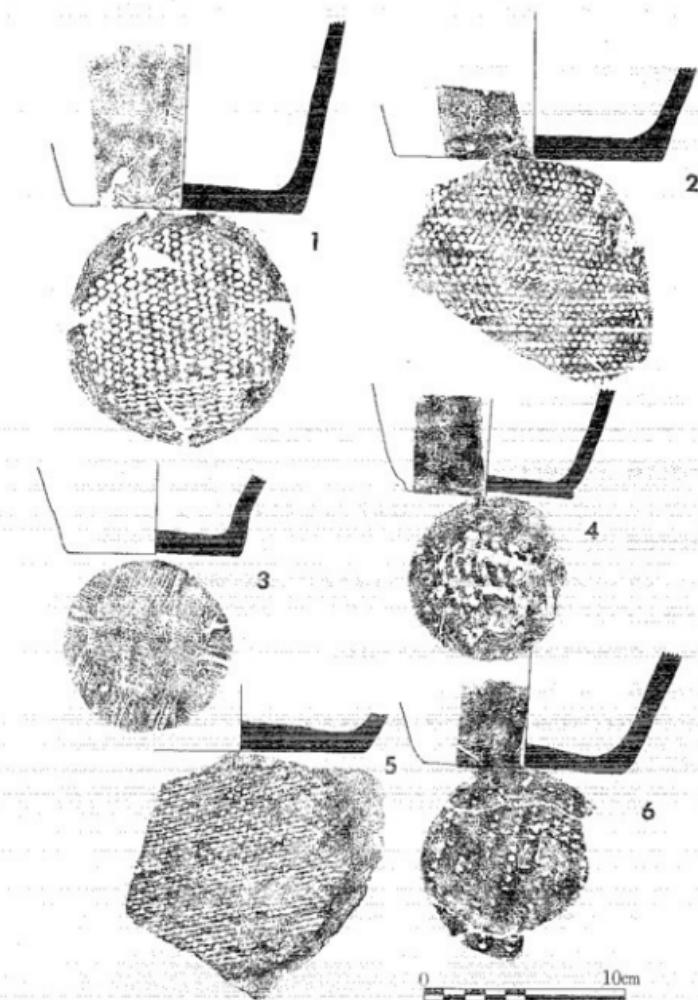


Fig. 9 (j) トレンチ出土土器拓影

Fig. 9 (j)は深鉢ないしは壺型土器の底部をあらわす。いわゆる網代文であるが、中に3の如きは籠の葉を用いたものもあるとみられる。

#### 4 S T トレンチ 出土土器 (Fig 10 PL 9)

Fig 10は S T トレンチからの出土土器の一部である。ここでも数種の文様がみられる。

##### 第45類土器 (Fig 10の 1)

縦文をほどこした器体の一部を擦り消し 器体部との間に 1条の縦を押圧して区別している。  
口縁部はわりあいに広い。

##### 第46類土器 (Fig 10の 2・3)

口縁にはほぼ垂直な撻糸を施す。

##### 第47類土器 (Fig 10の 4)

平行沈線で口縁に平行な線や 平行四辺形を表わした上器。

##### 第48類土器 (Fig 10の 5)

口縁部であるが 口縁に平行に沈線をめぐらし 1部の間を擦り消した上器。

##### 第49類土器 (Fig 10の 6)

口縁に平行にや、細い沈線をめぐらし その1部を擦り消してあるが 沈線の描き方その他は  
や、粗末である。

##### 第50類土器 (Fig 10の 7)

前類と同様であるが 各部分の工作がよりていねいである。

##### 第51類土器 (Fig 10の 8)

40・41類と同じモチーフであるが や・複雑なつくりである。

##### 第52類土器 (Fig 10の 9)

左右から交互に 沈線による直線及びその1端を曲げた曲線で構成する。

##### 第53類土器 (Fig 10の 10)

口縁部に3個の刻み目文のようなものがみられる。

##### 第54類土器 (Fig 10の 11)

第45類とほぼ似ているが 時期的にや・早いであろう。

##### 第55類土器 (Fig 10の 12)

巻き上げによる粘土のあとだけはみられるが 縦文その他の文様は 一切付けられていない。

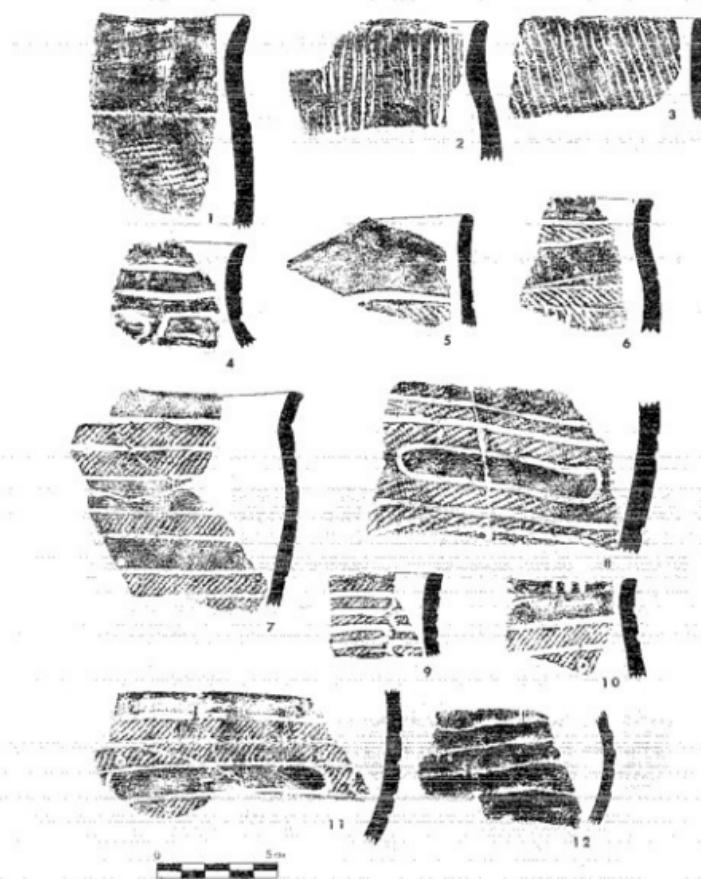


Fig 10 STトレンチ出土土器拓影

## 5 土偶・土製品 (Fig 11 PL.11)

Fig 11の1から8は 土偶 及び 土製品である。 1は妊娠した土偶で 衣服の痕跡はみられない。 首及び両手足を欠く。 長さは4.5 cm位である。 2も土偶で これも首・両手足と片方の乳房 及び 剥落した腹部をみせる。 3・4は土偶の足の片方である。 6は土製垂げ飾り品と思われ 全面に竹管により刺突文を施す。 7はや、これと異った装飾品であろう。 5は先の尖った帽子に似ており 中空である。 15は右足の爪先だけの残ったもので、裏側からみた足指が 右側に屈曲しているところをみると 座るなどの形をとっていたものではないだろうか。

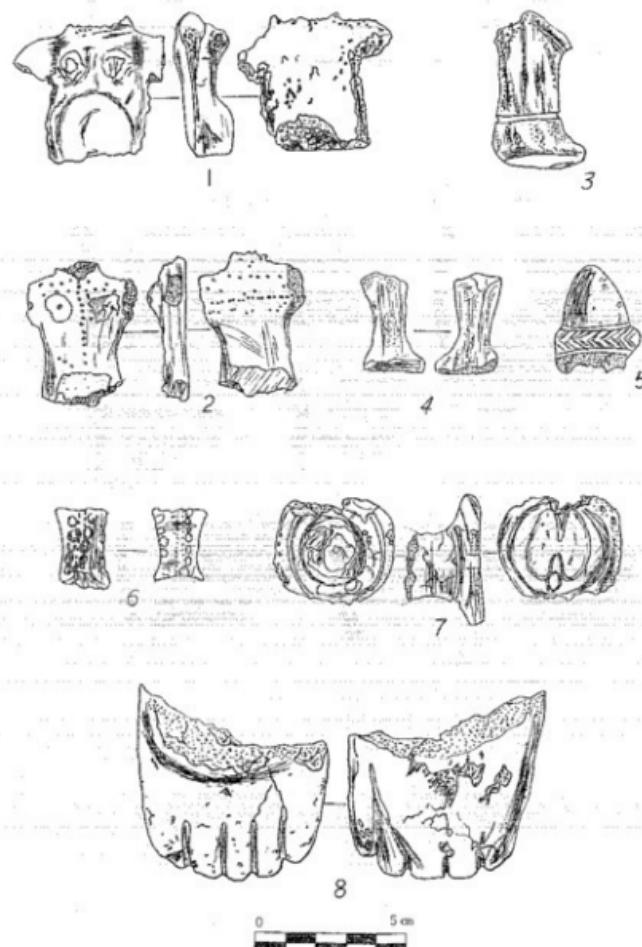


Fig 11 土偶・土製品

## 6 石 器 (Fig 12(a)～(c) PL 12(a)～(c))

Fig 12(a)からFig 12(c)はグリット及びトレンチ地区からの出土石器である。いわゆる石器と用途不明の石製品とがある。

### 石刀 (Fig 12(a)の1・2) (PL 12(a)の1・2)

1は粘板岩を磨いた磨製の石刀で表面全体に研磨時の擦痕がみられ製作過程がうかがえる。先端部が欠損しており現存部は7.5cmを計る。2は硅化木をみがいたもので基部の1部が欠けているがほぼ原形をとどめており長さは約15cmである。また基部にはアスファルトが付着している。

### 石鎌 (Fig 12(a)の3～5) (PL 12(a)の3～5)

3は有茎で紅玉髓製の石鎌である。4は半分以上欠損しているので原形は不明であるが両面加工が成されており大きさから推察して石槍もしくは14の類の石器であるかもしれない。石質はチャートである。5は純質真岩製の有茎石鎌である。未完成品のような気もある。

### 石匙 (Fig 12(a)の6・11～13・15～18) (PL 12(a)の6・11～13・15～18)

横型と縦型で8点出土している。6は横型その他は縦型でありいずれも剥片の片面に粗雑な剝離を加えただけのものであるが12・13・15は刃部に両面からの丹念な調整が加えられている。6は細剥片につまみを付した簡単なもので下方の辺辺にのみ片面からの剥離を加えて刃部を形成している。11はつまみの部分にアスファルトと思われるものが付着している。13はつまみの部分が欠損している。17・18はつまみが不明瞭である。石質はいずれも硅質真岩である。

### 石鎌 (Fig 12(a)の14) (PL 12(a)の14)

画面を丹念に剝離した一見石槍を思わせるような石鎌としては細身のものであり片面の一部に剝離面を残すが両端は鋭利に加工されている。石質は硅質真岩である。

### 磨製石斧 (Fig 12(a)の7～10) (PL 12(a)の7～10)

7は丹念に磨かれた粉岩製の石斧で刃部の1部が欠けているがその部分も磨滅している。8は小型の安山岩製の石斧で表面に研磨時の擦痕がみられる。9は基部が欠損しているがやや大型の石斧であろう。石質は粉岩である。10は刃部が欠損している。7・8・9が扁平なのに比してやや厚味のある石斧である。石質は粉岩である。

### 石皿 (Fig 12(c)の1・2) (PL 12(c)の1・2)

ともに破片で1は粉岩製2は泥質凝灰岩である。

### 石鍤 (Fig 12(b)の12・13) (PL 12(b)の12・13)

ともに安山岩質の扁平な河原石を利用したもので12は2個所13は3個所を打ち欠き辛がかりとしている。

### 磨石 (Fig 12(b)の14・15) (PL 12(b)の14・15)

ともに安山岩質の河原石で1部に磨滅した使用痕が認められる。

### 圓石 (Fig 12(b)の16・17) (PL 12(b)の16・17)

16はほぼ板状の粉岩に直径3cm程の凹みがある。17は泥質凝灰岩でほぼ球状を呈する。形状から磨石あるいは弾頭であるかもしれない。

その他の不定形打製石器 (Fig 12(a)の20~24 Fig 12(b)の1~5・11) (PL 12(a)の20~24 PL 12(b)の1~5・11)

20は下方先端部に調整剥離痕が認められるが、あとは部分的に粗雑な剥離が行なわれているのみで、尖頭器を思わせる石器である。石質は硅質貝岩である。21~24は剥片の片面にわずかに調整を加えたのみのものである。石質は硅質貝岩である。Fig 12(b)の1~5は剥片の1側面にのみ両面から調整を加えたものである。石質は硅質貝岩である。11はチャートである。

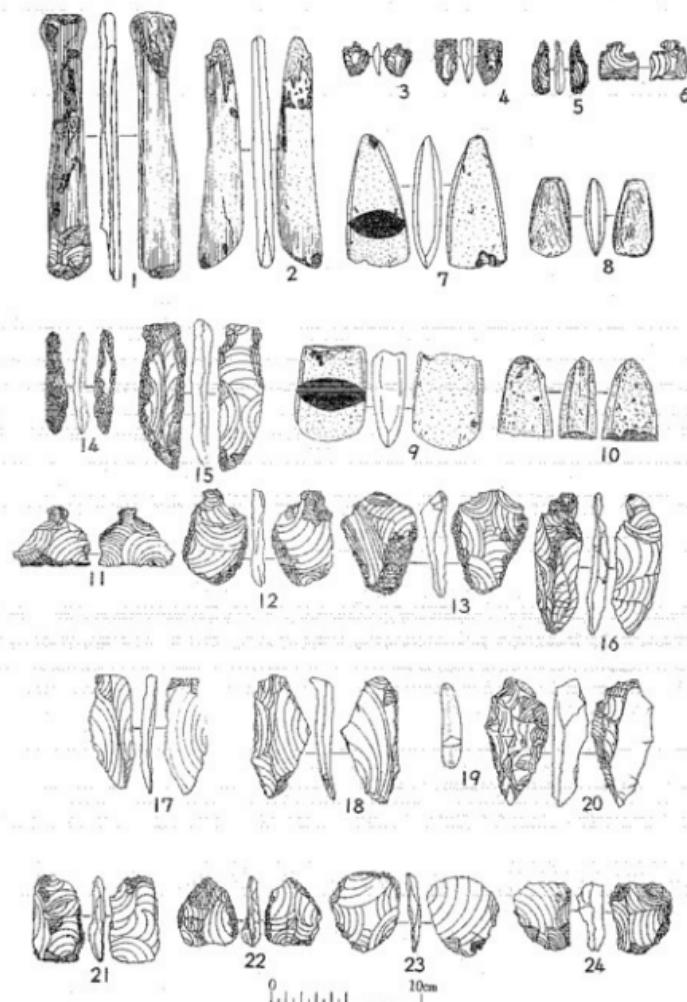


Fig 12 (a) 出土土器実測図

軽石製品 (Fig 12(c)の 4 ) (PL 12(c)の 4・5・7)

大型の板状軽石製品で、用途はいずれも不明である。断面はかまぼこ型を呈する。

その他の石製品

Fig 12(b)の 7 Fig 12(c)の 6 は柱状石製品で、7はその破片であろう。ともに5角形で、石質は安山岩質である。用途は不明である。Fig 12(b)の 9 は、石刀あるいは石棒の先端部を思わせるような石製品で、表面には擦痕が認められる。石質は安山岩質である。Fig 12(b)の 10 は珪化木の破片である。Fig 12(b)の 15 は、扁平な泥質の河原石で、研磨時にできたと思われる擦痕や磨滅部分が認められる。石質はシルト岩質泥岩である。Fig 12(c)の 8 は細長く、やや扁平な河原石を利用した敲打器と思われるものであり、側面が打ち欠かれている。石質は安山岩である。

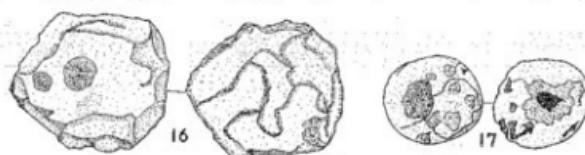
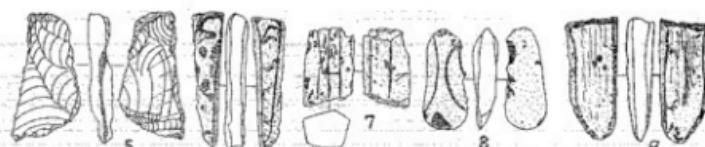
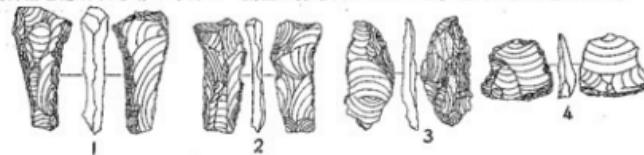
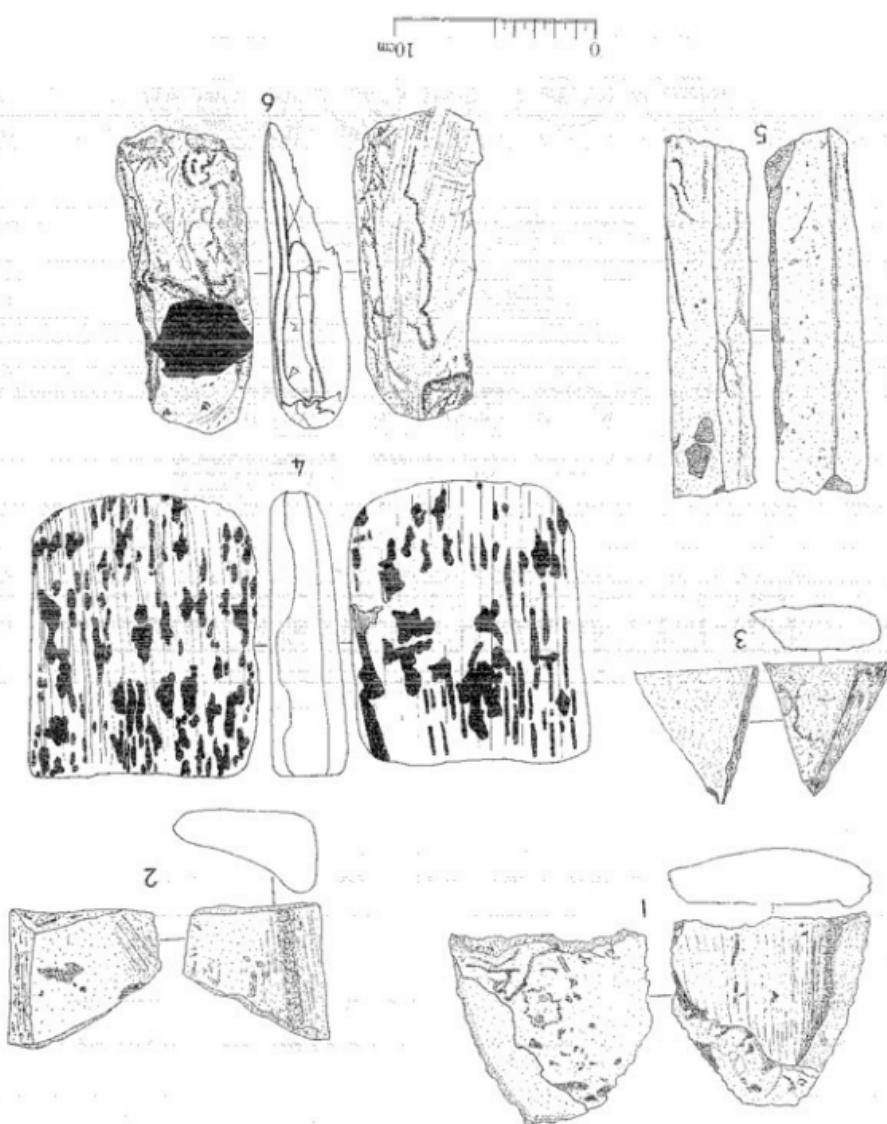


Fig 12 (b) 出土土器実測図

Fig. 12 (c) 出土石器实测图



## V 考 察

青森県十腰内遺跡や 大湯遺跡から出土した土器には共通なものが多く いわゆる縄文時代後期にあたることは明らかである。

しかし両者の違いは 十腰内遺跡に於ては土器が多く出土し 大湯遺跡では十腰内にみられない大ストンサークルを内包していた点である。

なにゆえにこの様な相違点があるかなど 今後深く追求せねばならない点であろう。また縄文時代後期の土器に もおもしろい型や文様のものが多いかも研究しなければならない。

大湯遺跡で特色ある石器として 2つの石刀と思われる石器があり 多くアスファルトが付着しているが用途はよくわからない。同様の石器は他にもある。石鏃が少なくスクレイパーの類が多いとともに 换型の石器もおもしろい。軽石の大形板状製品も出土したが用途は不明である。

十腰内の景観はわからないが 大湯風張台地は北に黒森山の美しい山容をのぞみ 遺跡としてまさに風景の美しい地である。

## 謝 辞

木等であるが この分布調査にあたって 発掘を快く承諾された松宮 勲氏 松宮栄一氏 松宮 喜一郎氏 および環状列石周辺のビジョンを語り合い 種々の情報を提供された大川原 S S 防除組合の諸氏 鮎高校生の宿泊と発掘員の人浴 洗濯の便を与えられた中村旅館 十和田高校定期制大湯分校 富沢正雄 原田幹子 京谷悦子の諸氏 分布調査の坪堀りに協力された県立十和田高校スキーパークアルペンの諸君 保存と調査について常に激励下さった県文化課の門間光夫氏 柳沢児衛市文化財係長 レンチ・グリットの設定測量と 用具の保管に御協力いただいた十和田営林署大湯種苗事業所の大山主任 大森俊男氏 特に事業所には多大のご迷惑をおかけした。そして発掘員の諸君。各位のご協力に厚く感謝の意を表します。

## 参 考 文 献

文化財保護委員会：昭和28年「大湯町環状列石」

磯崎正彦：1970「十腰内遺跡」

藤本英夫 奥山 潤 中田幹雄：1971「小坂環状列石噴塗」

奥山 潤 大里勝藏：1971「黒森山縄文期堅穴群」



1



2



3



4

PL 6 [a] トレンチ出土土器



1



2



3



4



5

PL 6 (b) トレンチ出土土器



1

2



3

4



5

6

PL 6 [c] トレンチ出土土器



1

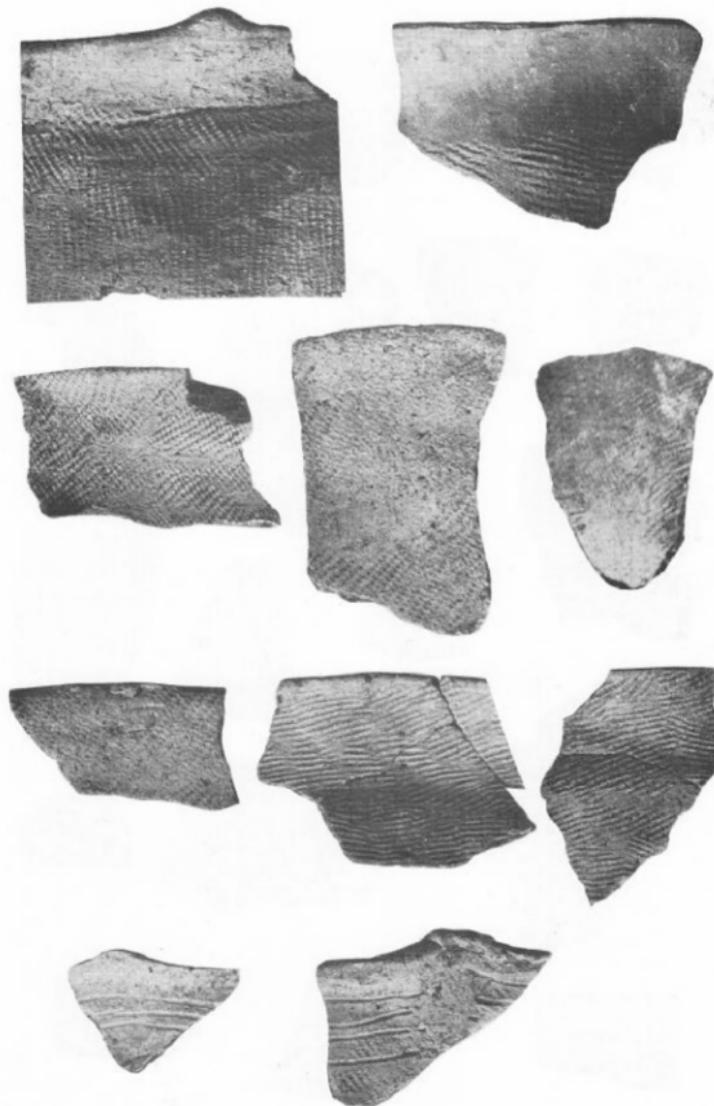
2



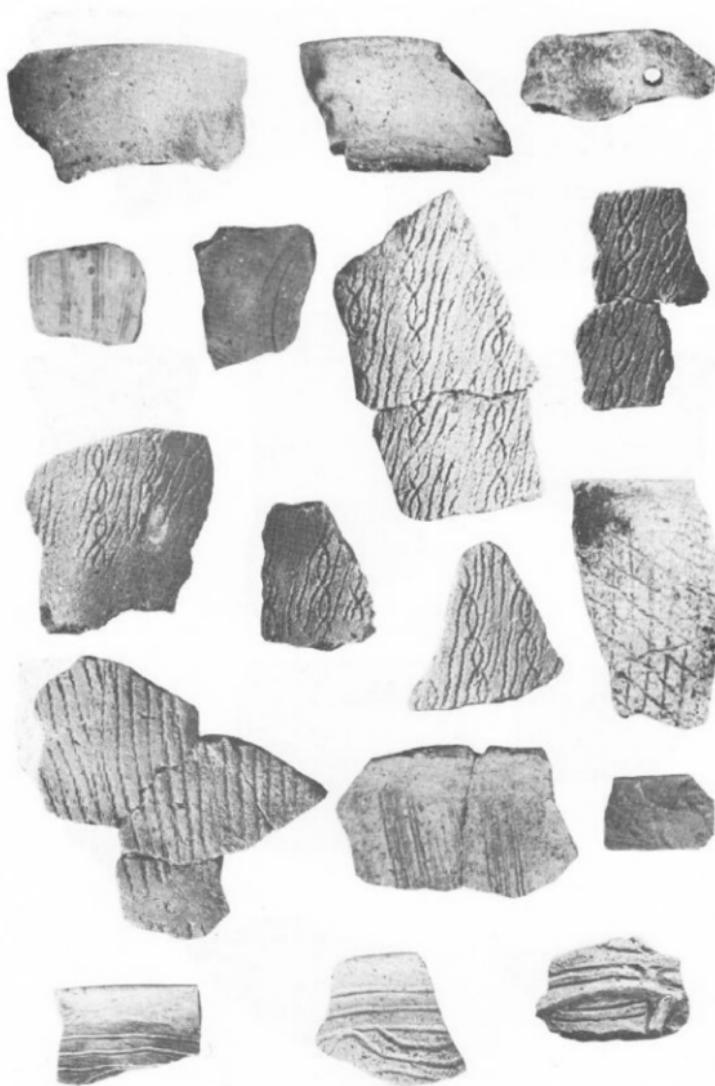
3

4

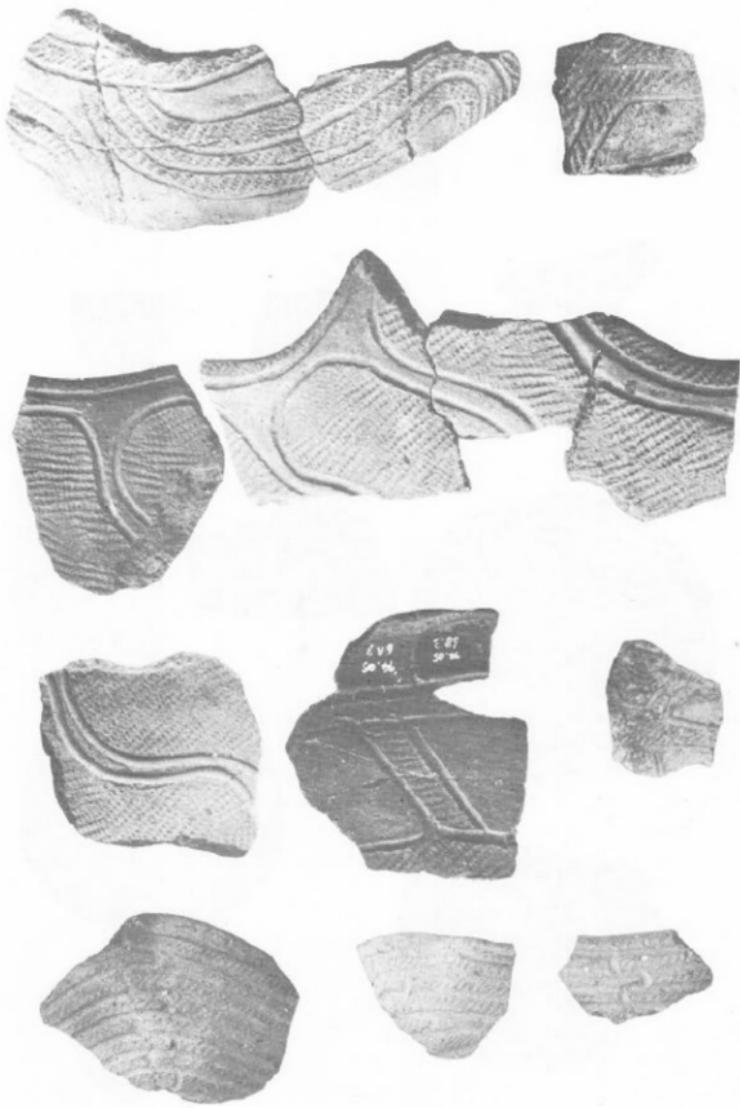
PL 6 [d] グリット・トレント出土土器



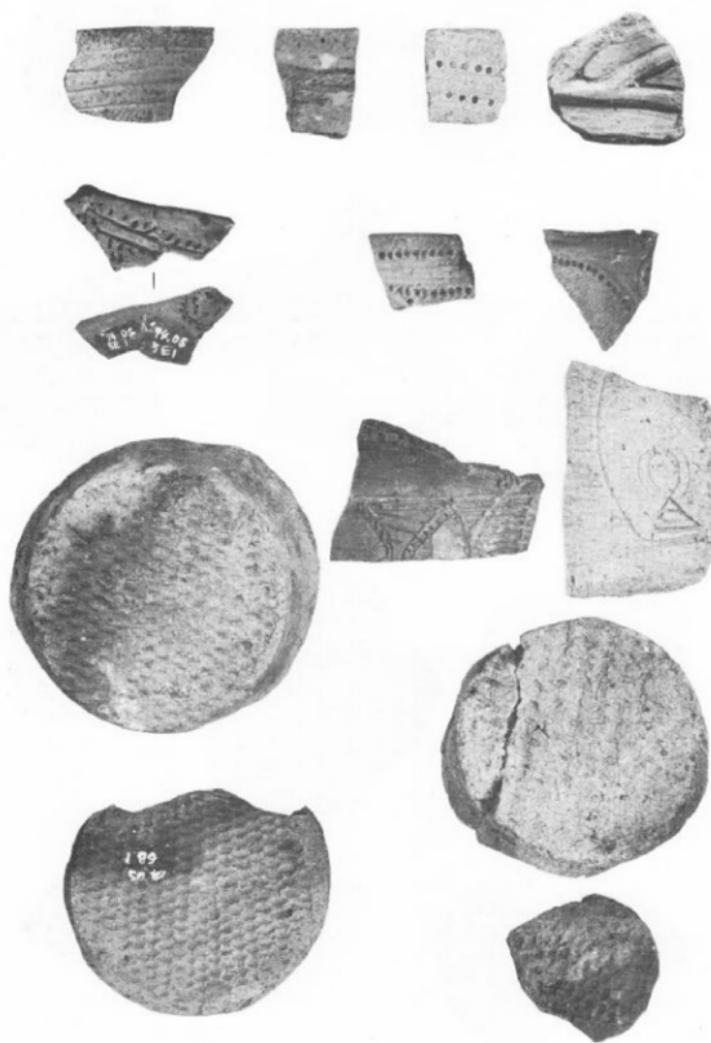
PL. 7 (a) グリット出土土器



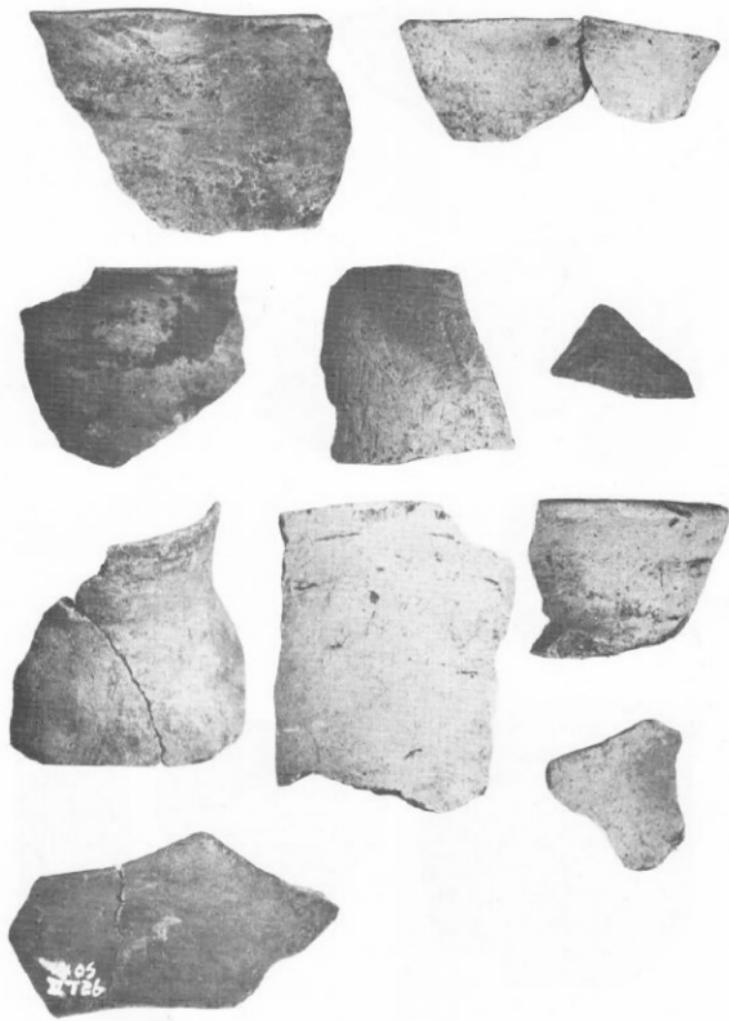
PL 7 [b] グリット出土土器



PL 7 [c] グリット出土土器



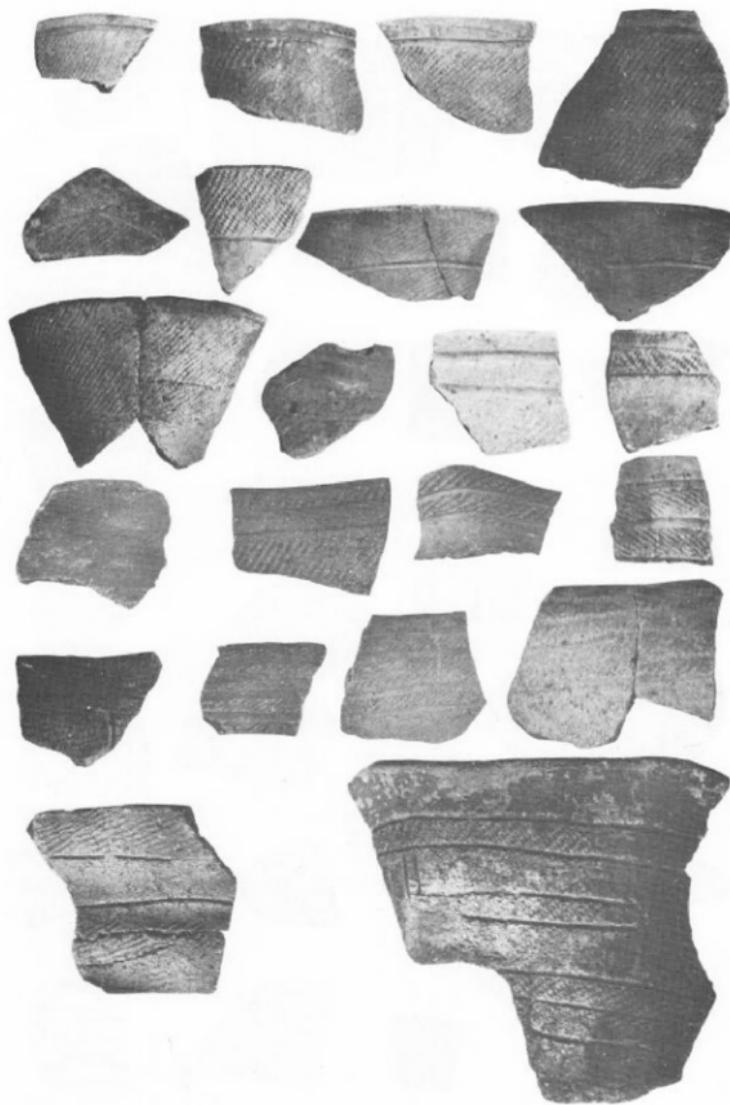
PL. 7 [d] グリット出土土器



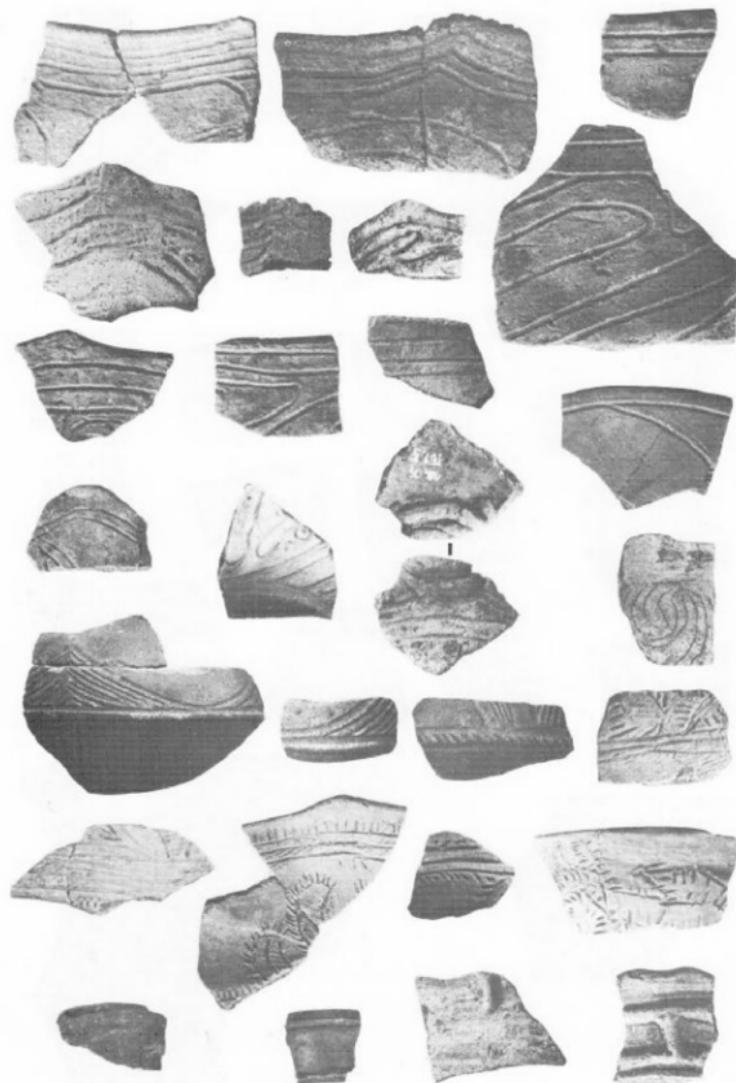
PL 8 [a] トレンチ出土土器



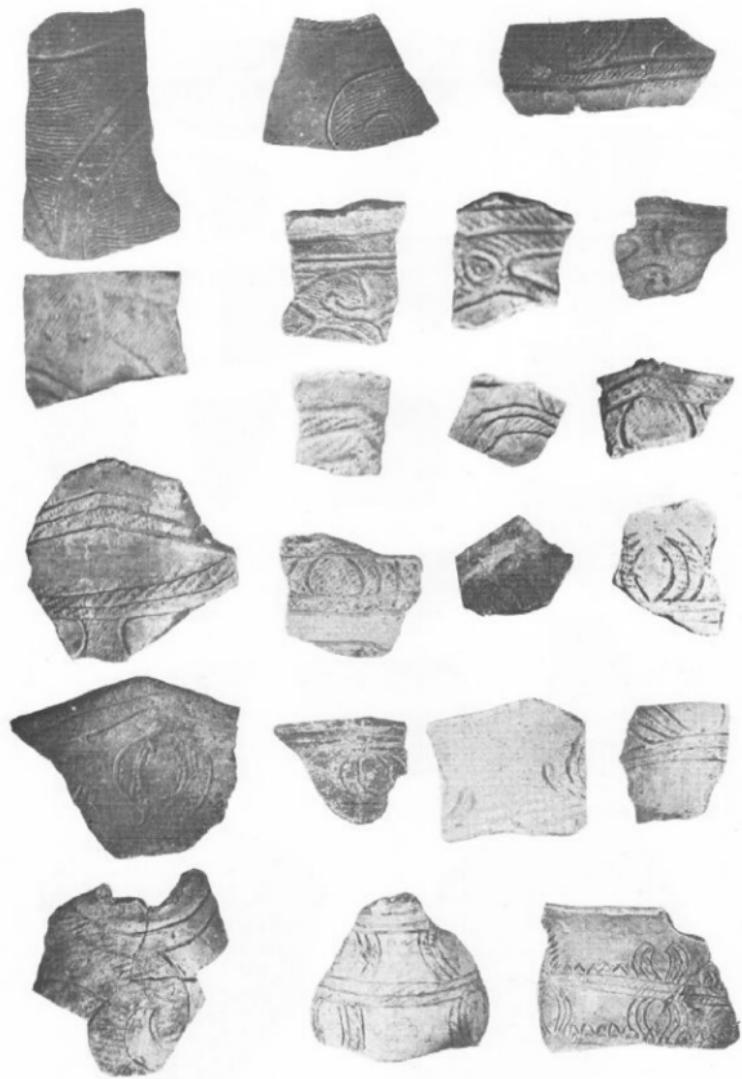
PL 8 [b] トレンチ出土土器



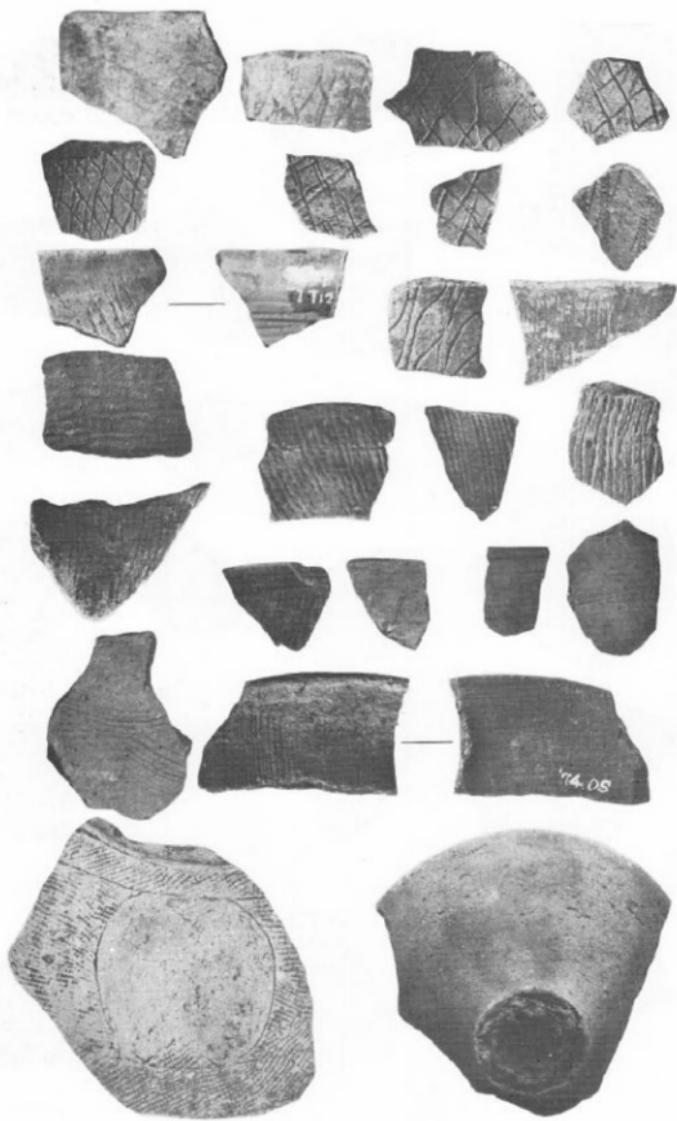
PL 8 [c] トレンチ出土土器



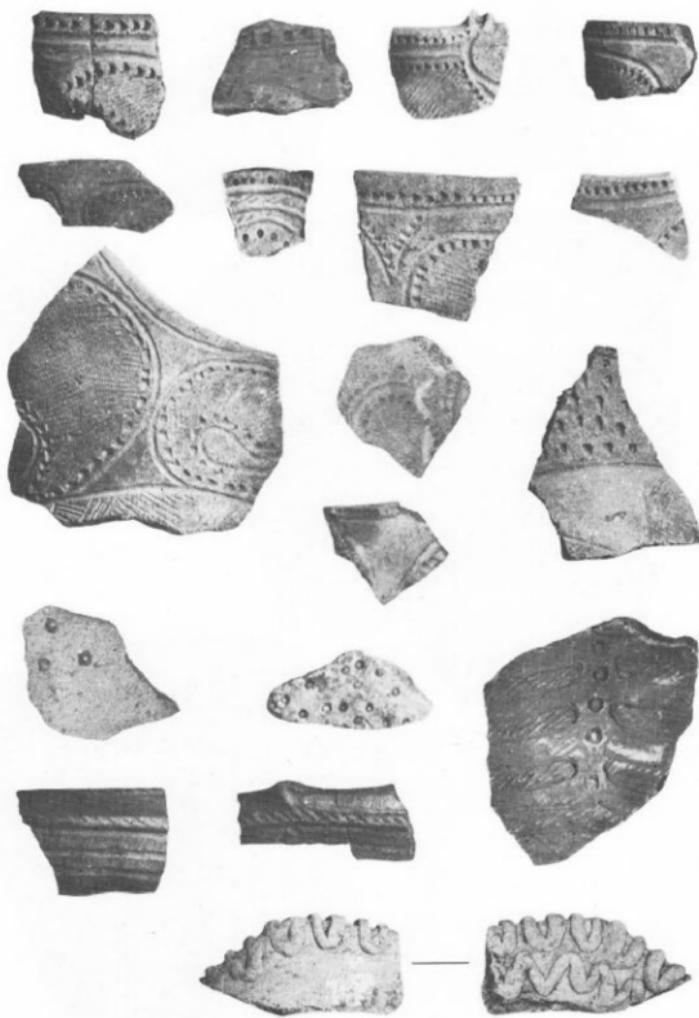
PL 8 [d] トレンチ出土土器



PL. 8 [e] トレンチ出土土器



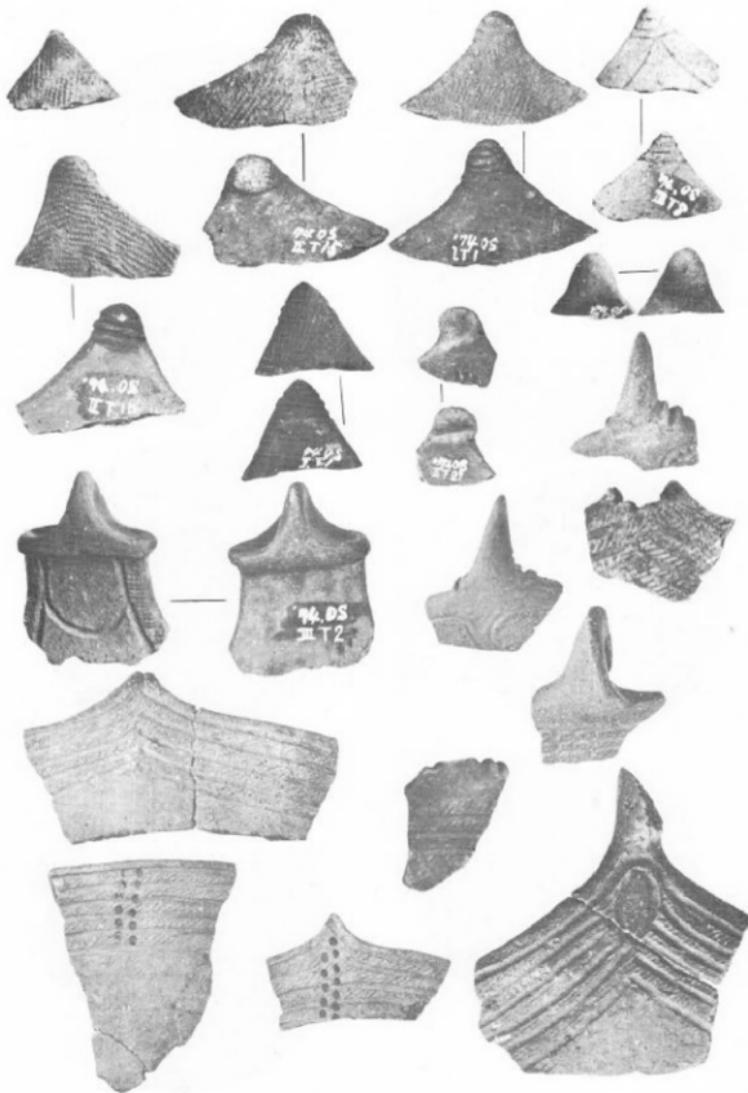
PL. 8 [f] トレンチ出土土器



PL 8 [g] トレンチ出土土器



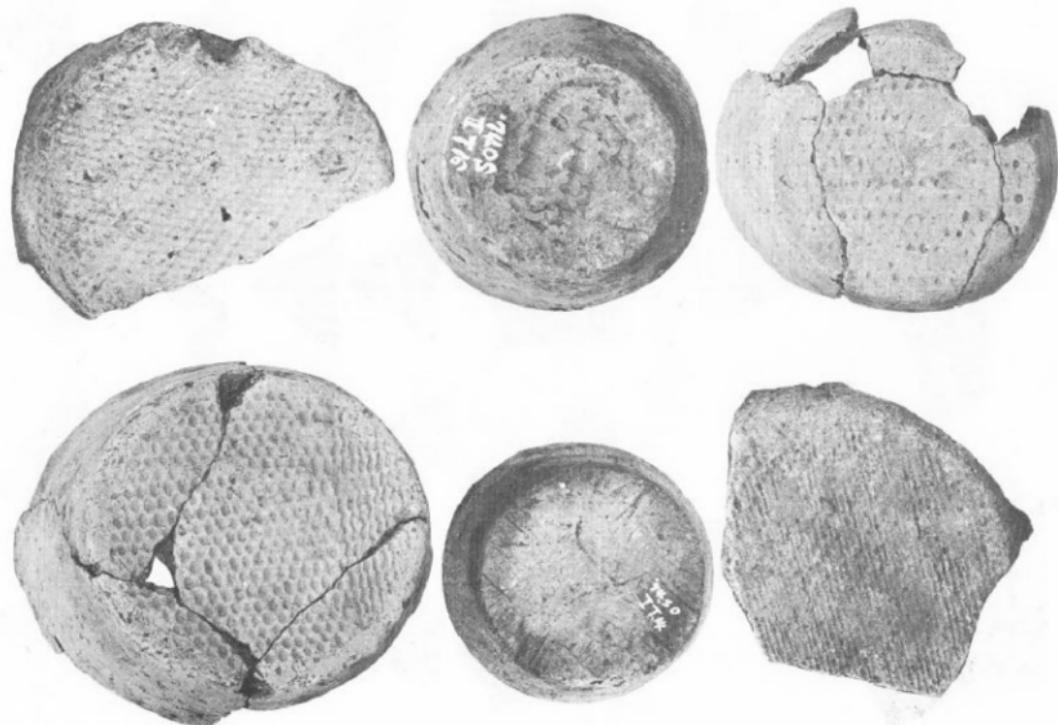
PL 8 (h) トレンチ出土土器

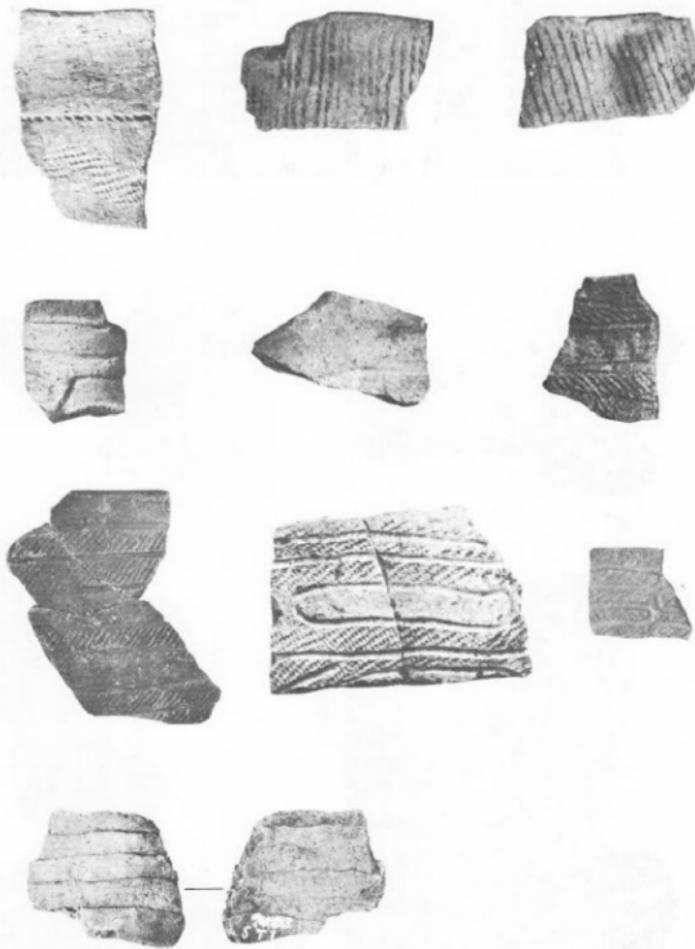


PL 8 [i] トレンチ出土土器

PL. 8 (J) トレンチ出土土器

— 60 —





PL 9 ST トレンチ出土土器



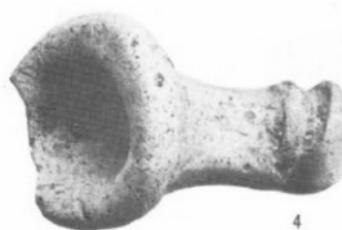
1



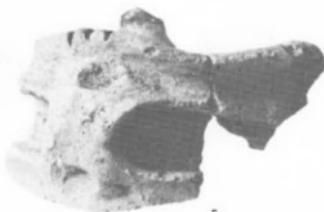
2



3



4



5



6

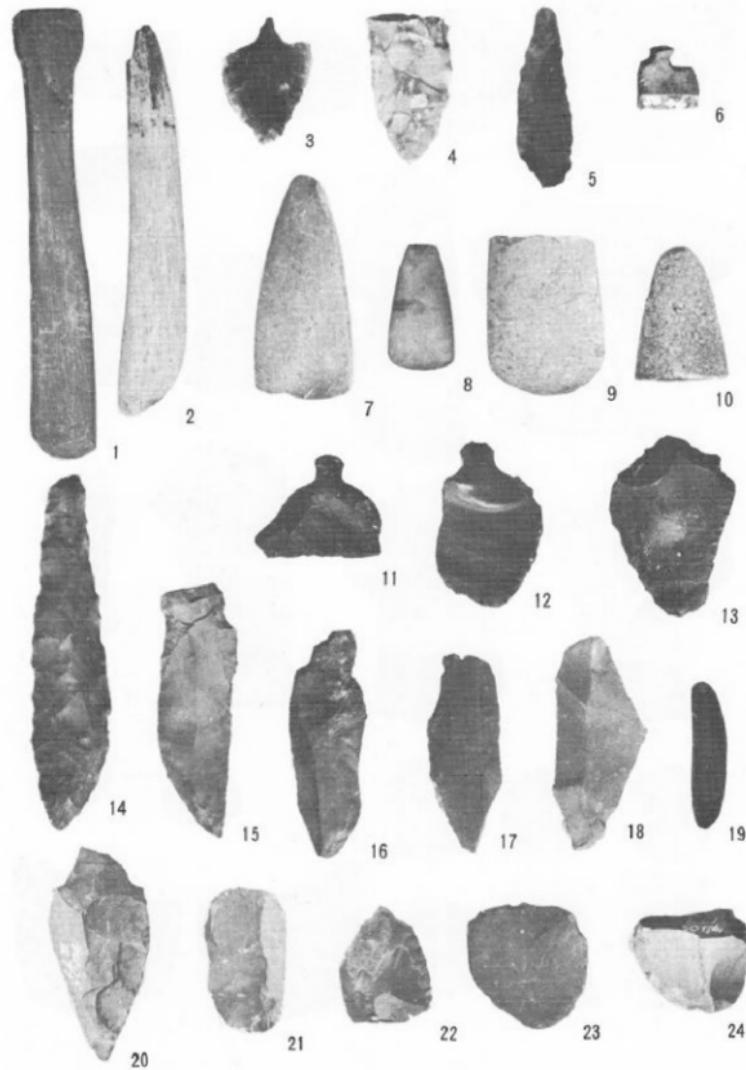


7

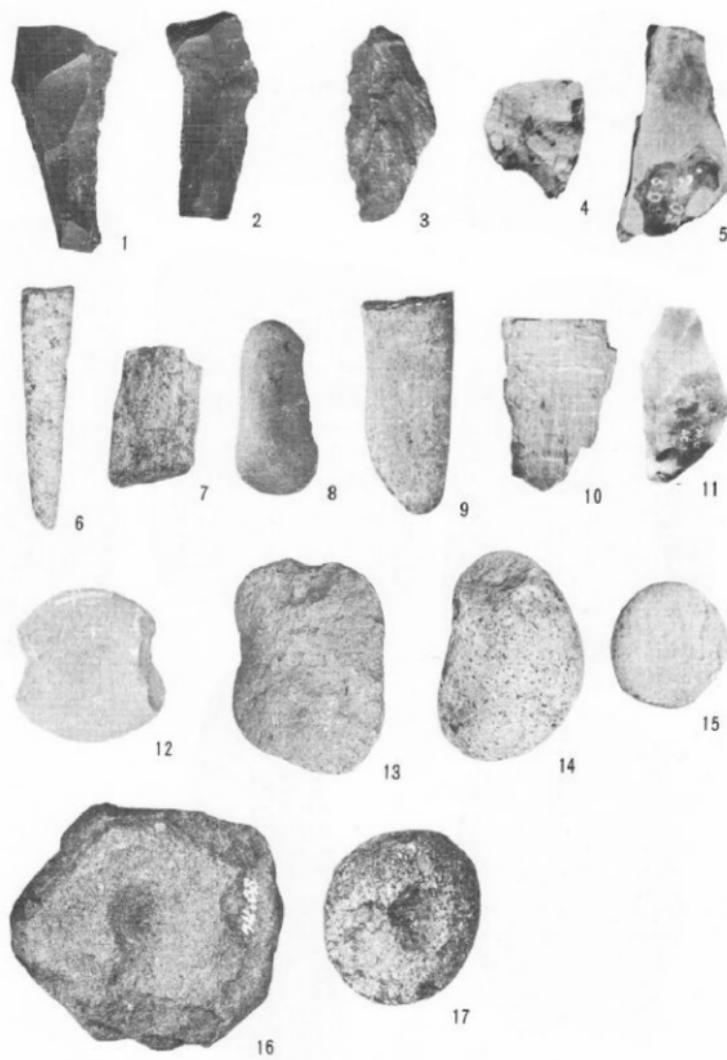
PL. 10 グリット・トレンチ出土の口縁及び把手



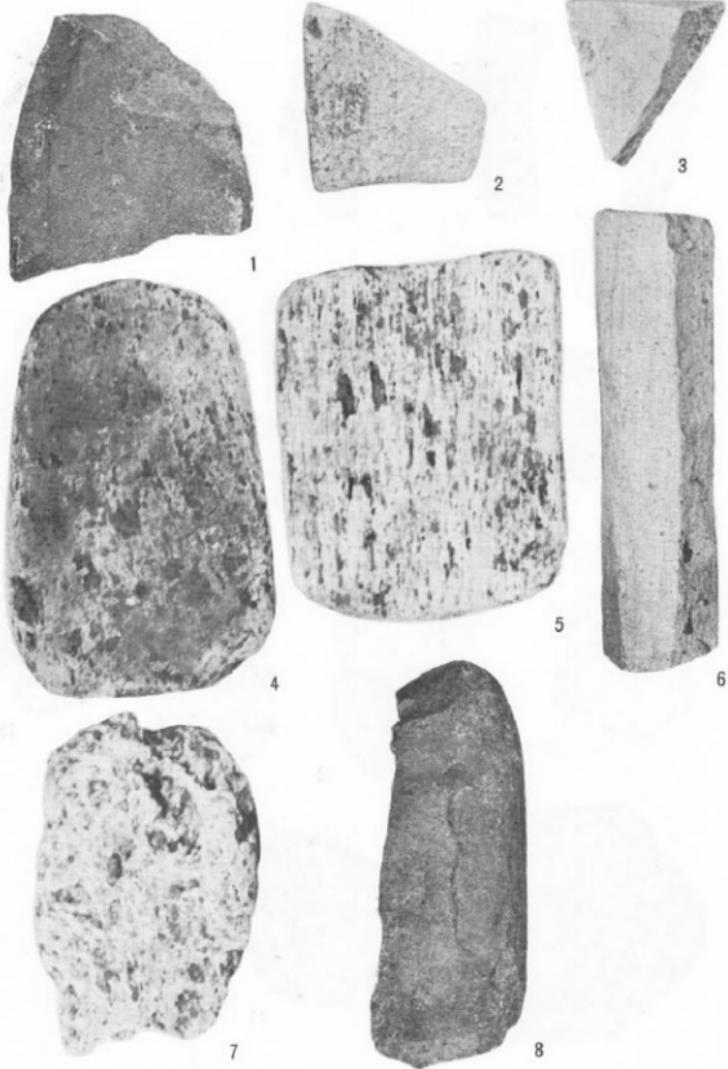
PL. 11 土偶・土製品 1~8は小型土器の底部及び台



PL 12 [a] 出土石器



PL 12 [b] 出土石器



PL 12 [c] 出土石器



1 グリット調査地区(南から)



2



3 東から調査地区を見る。  
後方柵は万座遺跡



4 3F・4Fの石と水道パイプ



5 4D・5Dの土器出土状況



6 グリット内の土器出土状況

PL I3 [a] グリット地区



1 6Fの石と水道パイプ  
パイプの布敷により大湯浮石  
層が除去されている。



2 5C壁にくいこんだ石に土器が  
押しつぶされている。



3 瓢と思われる口縁部に平石がのって出土(3G)



4 台付土器出土(7A)



5 浅鉢出土状態(3G)



6 3Gの石及び土器出土状態



1 レンチ調査予定地



2 I区壁に近く深鉢出土



3 I区の焼土とII区土器出土状態



4 I区焼土の状態



5 II区土器出土状態



6 II区 石の出土状態 (右側は  
いわゆる平石)



7 土器出土状況

PL 14 (a) レンチ地区



1 II 区の平石



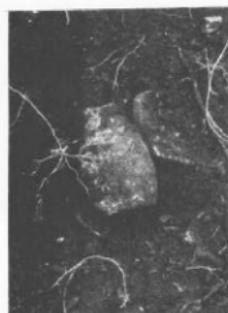
2 平石と土器出土状態



3 土偶爪先出土



4

5 完成型出土（下に他の土器の  
底部がみえる）

6 完成型小形器出土状態

PL 14 [b] トレンチ地区



1 III区の完型小形壺



2



3



4 S TトレンチII区の石出土状態



5 S TトレンチII区の土器出土状態



6 石で囲まれた状態で出土した。

P L 14 [C] トレンチ地区  
4・5・6……S Tトレンチ